
子どもの世界

甲斐仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子どもの世界

【ZPDF】

Z3861M

【作者名】

甲斐仁

【あらすじ】

子どもだけの世界で生まれた。人はみな、子どものまま生きてい
く。成長をはじめた、俺の身体 大人の存在は、罪になる。

プロローグ

ヴィレンンドは、逃げていた。

肩で息をしながら、命の樹を手摺して全速力で走る。辺りは暗く、何度も草に足をとられて転んだ。顔や手足など、素肌がみえていたところは細かい擦り傷ができる、血がにじんでいた。

それでも、立ち止まるわけにはいかない。もうすぐつしままで、追手はせまっていた。

「ヴィレンンド、こちげー！」

パルスが呼んだ。
みれば、命の樹の聖域に、少女とみまがう少年が立っている。パルスだ。

(もつししだ。もつししで、聖域にたどり着くー)

天に届く巨大な樹 命の樹と呼ばれる樹の根元は「聖域」と呼ばれていて、ヴィレンンドたけの「親」である。

じつやつて生まれるのか。じつやつて消えていくのか。
すべてが謎のこの世界で、ヴィレンンドたけは「子ども」の姿で生まれ、「子ども」の姿で消えて行く。
やがてこの世界の住人はすべて、子どもだった。それが、この世のことわりなのだ。

「ヴィレンンドー、こちげー！」

聖域は、目の前だ。ヴィレンドは重くなっている足を必死に引いて、聖域へ転がるようにして飛び込んだ。

ヴィレンドが聖域に足を踏み入れた瞬間、パルスが右手にもつた杖をかかげた。

バリツという音がして、雷鳴が空にとどろく。

「されど、神の子でありながらこの世のことわりを崩すつもりか！」「ヴィレンド世家にあつてはならぬ存在だぞ！」

「お前の地位まで危うくなるところ」とを、わかつておるのか！」

追手の子どもたちが、口ぐちに叫んでいる。

彼らはそれ以上近づこうとしなかつた。どうやら、立っている場所と聖域との間に、見えない壁のようなものが存在するみたいだ。

「だから、僕は、ヴィレンドを異界へおくるんだよ」

「やめようなど、法王は許可されておられぬ。」

「ならば、僕の地位をばく奪し、処刑するといい。友のためならば、この命惜しきなどない！」

一層激しい雷鳴がどどろき、追手は數歩づきろへさがつた。

それ以上ござる事もできず、追手はただパルスを睨みつけて

いた。

ヴィレンドは追手がこないことを確認すると、重い足をうごかしてなんとか立ちあがり、パルスの元へ歩み寄った。命の樹の根にもたれ、ずるずると座りこむ。

「パルス、お前の身が危なくなる。俺のことはもういい」「よくなどないよ。ヴィレンド、君は僕のことを差別しなかつただらうつ~」

肩で息をするヴィレンドに、パルスはほほ笑みかける。

パルスは、異端の力をもつて生まれた、神の子と呼ばれる存在だった。

時折、命の樹から、人にはあらざるものとの力をもつ子どもが生まれる。その子どもは神の子と呼ばれ、いづれは法王につかえる身となることが決まつていて。

しかし、同時にその力をおそれられ、友もできぬ孤独を背負つことになる。

パルスは生まれつき、雷をあやつり、自然と一体化する力をもつていた。

神の子のなかでも稀にみる巨大な力に、人々はみな、パルスを避けた。

「これをもつていつて。ただし、いいか、ヴィレンド。これは、一度しか使えないし、一度使うと取り消すことができない」

パルスは、金色の鍵をヴィレンドに手渡した。

細かな装飾が彫られていて、ルビーのような真つ赤な石がはめられている。

「いや、パルス。それより俺が処刑されれば、それでぜんぶつまくいくんだ。この鍵も、なにかは知らないが俺は」

「持つていつて。早く、急いで。立つて！」

「パルス！」

パルスは、ヴィレンドを立たせると、その手に鍵を押し付けた。
そのまま、命の樹の根に、力いっぱい、ヴィレンドの身体を押ししつける。

「ヴィレンド。」この鍵は、一度だけ願いをかなえることができるんだ。ただし、誰かを殺すこと、誰かを生き返らせることはできない。「パルス、なにをするんだ。俺はもういいって言つていいだう?俺が逃げたら、お前が罪をとられる!」

命の樹の根が、突然ぐにやりと曲がった。
辺りが淡い金色の光を発し出し、すぐそばで別の景色がみえる。
ヴィレンドは、瞬きをくじかえした。

「どうなつてるんだ!」

「君を、異界へおくる。僕も、どの世界へ君がたどりつくかわからぬ。ヴィレンド、その鍵はきっと君の役に立つだろ?」

「パルス!」

パルスの顔までもが、歪みだした。
パルスがそこにいるといつて、パルスに重なるよつて見たこと
もない風景が見える。

「だめだ、俺はいい。頼む、お前が罪をとわるのは、俺はたえられない!」

「ヴィレンド。お前に会えてよかつた」

「パルス、待て。おい、なんだこれは。おい、パルス!」

ヴィレンドを押しつけていたパルスの手が、消えた。見えていた命の樹と聖域がかき消され、別の景色が広がっていく。

「パルス！」

フツ、と空んでいた空間が、もとに戻った。

けれど、そこはもう、ヴィレンダの知る世界ではなかつた。

プロローグ（後書き）

以前に書いたものですので、色々読みづらいところもあるかと思います。

自分の記録のために、ほとんど加筆せず投稿中。。。

申し訳ないゝゝ

すでに完結済みですので、最後まで投稿します。

付き合つてくださった方、付き合つてくださる方、ありがとうございます！

1、新たな生活

聖域と呼ばれる「命の樹の根」から、子どもが生まれる。

肌の色が違う。身長が違う。髪の長さが違う。

皆、少しずつ違うところがあるが、子どもであることに変わりはない。

だが、中には「個性」ではすまされない、特徴ある子どもが生まれることがある。

それが「神の子」と呼ばれる異端の力をもつ子ども。

そして、もうひとり。

子どもの姿から、大人の姿へ変化する者だ。

ヴィレンンドがまさに、その「成長する子ども」だった。

成長する「」の身体に気づいたヴィレンンドは、自分の身体をあそれた。いつか法王に知れれば、処罰が下るからだ。

親友であるパルスだけが、その秘密を知っていたが、やがて秘密はもれて、ヴィレンンドは追われた。

大人は、この世のことわりを壊す存在だ。みつかれば、その場で厳しい処罰が決まっている。

だから、逃げた。生きたかったから、ヴィレンンドは逃げた。

(だが、パルス。お前を犠牲にしてまで、生きたいとは思わないっ)

ヴィレンンドは、地面に膝をついた。冷たい感触が、足についたわる。見覚えのない景色をぼうぜんと見つめていたが、ふと、空をみた。

空は、さつさままでいた世界と同じで、とても広く、暗かった。ヴィレンンドはふりつづ足で立ちあがると、そばにあつたベンチに座つた。

ベンチは、ヴィレンンドが生まれた世界のものと似てゐる。しかし、見える景色のすべてが、違つた。

道は硬く、草一本生えていない。道の両側には、家だらうか。四角い建物がずらつと並んでゐる。

なにより、夜なのに明るかつた。道に一定間隔にならぶ、灯りのせいだわい。

わうわくとは違つ、変わつた灯りだつた。高いところにあるが、どうやって火を灯すのだろうか。

(そうだ、手渡された鍵)

ヴィレンンドは、右手に握りしめた鍵を思い出した。

この鍵は、たつた一度だけ願いを叶えると、パ尔斯が言つていた。

にわかには信じられないことだが、パ尔斯は神の子として法王に仕える身。頻繁に法殿にも出入りしていたのだから、もしかするとこの鍵は法王の所有物かもしれない。

ヴィレンンドは、最後にみたパ尔斯の姿を思い出して、拳をこぎつしめた。

鍵のでっぱりが手に食い込んでいたかつたが、そんなことを気にする余裕はなかつた。

命がけで、パルスはヴィレンンドを逃がした。

ヴィレンンドは生きたいと願つたが、誰かを犠牲にしてまで生きようは思わない。自分はそんな、大層な人間ではないのだから。

ヴィレンンドは立ちあがると、左右に広がる道を歩き出した。

いきなり飛ばされた見知らぬ世界で、まるで一人きりになつてしまつたような錯覚をおぼえる。

この世界には、どんなひとが住んでいるのだ？ もしかすると、ヒトではないのかもしない。

ふらつく足取りで歩いていると、小さな茂みのおくに、湖をみつけた。

建物ばかりの中に、まさか水が湧いているとは思わなかつた、ヴィレンンドはあわてて駆け寄り、喉をつるおす。

少し臭い水だが、逃げるときに走つた身体は水を欲していた。水に触れたしゅんかん、手に痛みが走つて慌てて手をひっこめる。逃げる際に、細かな傷を負つていたことを忘れていた。

パシャン、と水がはねた。

サカナがいるようだ。水面下に、うっすらと白い影がみえた。白と赤が混じつている影もある。

(変わった色のサカナだ。だが、綺麗だ)

ねずみ色のサカナしか見たことがない、ヴィレンンドは、驚いて手をのばした。

早くて捕まえられないが、捕まえれば食料になる。

痛みを感じて傷を思い出したよつ、サカナをみて空腹であることを思い出したヴィレンードは、湖へと身体をのりだして、水面を手でまさぐった。

バシャバシャと水がはねるが、湖が深くてサカナまで手が届かない。

(なにか、道具がいるな)

「誰か、いるのかい?」

ふと、声がした。

びつやう、音をたてすぐれたようだ。

ヴィレンードは、とつとて戦う構えをとつて、声のまゝへ田をこらす。少なくとも同じ言葉をしゃべる生き物がいることは確かだが、それが味方とはかぎらない。

茂みをかきわけで、小さな影が近づいてくる。

(子どもか……?)

大きさからして子どもかもしれない。

構えをとつていたヴィレンードは、警戒を緩めて手を下げた。しかし、現れたのはおぞましい姿の生き物だった。

その細く筋張った姿に、ヴィレンードはぎょつとして後ろへ下がった。

「あらあら、こんな夜中になにをしているの?」

「何者だ。お前は、ヒトか

「ヒト? どうこう意味かしら。あなた、いくつ?」

その生き物は、おそらく人だと思われた。
だが、ヴィレンンドの知っている人間ではない。少なくとも、今までこんなおぞましい人間はみたことがなかった。

顔は皺だらけで垂れており、背中は曲がっていて杖をつかねば歩けないらしい。

杖をもつ手は筋張つていて、骨が浮き出でてゐるみえた。

「あなた、うちへくる? スープくらいこなら、」ヒツガハナハナムケレド

「知らぬ者の家へは行けぬ。お前は、何者だ」

「かしここ子ね。あたしは、角の家に住んでるフーシャつてこいつねばあさんよ」

「フーシャ? 名前か。それとも、そういう種族なのか」

「フーシャつてこいつのは、親からもられた名前ね」

フーシャは、きびすを返した。

「ついておいで。怪我の手当でもしないとね」

ヴィレンンドは、ついて行くと言つてこない。なのに、ついてくるのが当然だというよに、フーシャは歩いて行く。

ヴィレンンドは、考えた。

(あのフーシャといつヒトから、この世界について聞き出すのもいいかもしれない)

なにかあれば、逃げればいい。それに、最悪の場合、願いがかなうという鍵もある。

ヴィレンンドは、ポケットの中にしまった鍵をこじきつしめて、その存在を確かめた。

「どうしたの？ おいで」

フーシャが立ち止まつた。

「わかつた、今いく」

ヴィレンンドはうなづくと、フーシャのあとを追つよつて出しだ。

やはり、四角い建物は家だつたようだ。

別れ道の角にある、小さな建物。そこが、フーシャの家だつた。

家の前には小さな門があり、なにか書いてあるよつだが、ヴィレンンドの知つてゐる字ではなかつた。短い文だとこうのに、読むことさえできない。

家のなかは、広かつた。ヴィレンンドが一十人は寝こりべる。

「「じ」が、家か。俺の知つてゐる家とは、違つ」

「そうかもしれないわね」

「「じ」が、特別なのか」

「どうかしら。他の家は、もつと豪華だと思つけれど」

「「じ」よりも？ 俺の家は、ベッドと机、あと椅子があるだけだ」

「あら、そうなの。台所はないの？」

「なんだ、ダイド「口」というのは。……あれはなんだ」

変な音をたててゐる、白い四角い箱を指さした。

「冷蔵庫よ」

「あれは?」

「レンジよ」

「なにをするものだ」

「生活に必要なものかしらね。食べ物を保存したり、温めたりするの。……ねえ、あなたはどこからきたの?」

ヴィレンドは部屋をひと通り見回すと、椅子に座った。逃げる際につけた傷が、しきしきと痛む。

「どこだつていい」

「別の世界から、来たんでしょう?」

ヴィレンドは、フーシャを睨みつけた。

「この世界のことわりは解らないが、そう簡単に「別の世界」という言葉がでてくるとは思えなかつたからだ。

少なくともヴィレンドがいた世界の子どもたちは、パルスのよう

に特別な地位にいない限り「異界」の存在は知られていなかつた。

るうか。

ヴィレンドの視線を受けて、フーシャは壁際にある変な長椅子へ歩いて行つた。その様子を注意深くみていたヴィレンドだったが、フーシャが細長い棒を押した瞬間、驚いて立ちあがつた。

なんと、何も無いところから突然、水が出てきたのだ。

「きやまは、神の子か!」

「あらやだ、そう見えた?」

「何も無いところから、水を出しだろう」

フーシャはほほ笑むと、取っ手のついた妙な形の器に水をいれた。その器を、いましがた水をだした長椅子の隣に、置く。

「じゃあ、これも驚くかしらね」

フーシャがつまみをつまむと、ボツという音がした。今度はなんと、何もないところから火がでたではないか。

「やはり神の力を得ているのか。俺をどうするつもりだ」

「わたしはね、そんなたいそうな人じゃありませんよ。これはね、誰でもできるの。あなたの世界はどうか知らないけれど、ここでは普通なのよ」

フーシャは、杖をつきながら部屋の反対側へ移動した。棚から四角い木箱をとりだすと、それを抱えて、ヴィレンンドの傍へきた。

警戒するヴィレンンドに笑つてみせると、

「手当てをしないとねえ」

と言つて、四角い木箱を開けた。

「さあ、手をだして」

「断る。フーシャ、お前は怪しい。その身体に、先ほどからの言動。ただのヒトとは思えない」

ヴィレンンドは、力いっぱいフーシャを睨みつけた。

そのまま護身用の小剣を取り出すと、戦うかまえをとる。

ヴィレンンドとて、大人へ成長する身をもつて生まれたが、長年にわたり戦士として鍛えてきた身。簡単に逃げられる、と思ったのが

間違いだつた。

神の子となれば、逃げるのが容易いはずがない。もしかすると、配下の追手を出される可能性もある。

フーシャは向けられた剣を見て、そつと息をはいた。

「なにから、説明すればいいかしら。なにが、ききたい？ 答えるわ」

「その身体だ。俺は、お前のよつた身体のものを見たことがない」

「わたしはね、おばあさんだからよ」

「オバアサン？」

「そう。歳をね、とつたのよ」

ヴィーレンドは、ぎょっとした。

（歳をとるへ、歳をとるとは、つまり、成長するところの意味と同じだ）

まじまじとフーシャをみつめ、力なく首をふる。

「まさか。成長すると、そういうのか。……俺も？」

「ええ。ひとは歳、歳をとると皺しわになつて、わたしみたいになるの」

「とても、醜い」

「そうかもしけないわ。でも、ここまで生きられたことを、わたしは感謝しているの。主人は若いつちに、捕えられてしまつたから」

「シユジン？ 仕えていた主がいたのか」

「夫のことよ。二十五のときこ、結婚したの」

「オット？ ケツコン？」

(「ひどい意味だ？ わざわざわからなー）

ヴィレンは、いつの間にか歯がゆさを感じた。異界へ渡ると、つまつとうとうことなのだ。すべてが新しくなり、常識そのものが変わってしまう。今まで積み重ねてきたものが、ここではなんの役にも立たなくなる可能性もある。

フーシャは、皿を細めてほほ笑んだ。

「あなたの世界との世界は、違うのね。あなたの世界は、どんな世界なの？」

ヴィレンはまた、フーシャを睨みつけた。探られているのかもしれない。

それをみて、フーシャはうなづいた。

「やうね、言いたくなればいわなくていいわ。だから、傷の手当だけさせてちょうだい」

骨と皮だけの手が、差し出された。

(恐ろしい、魔物のような手だ)

自分も成長を重ねねば、この手のような手になるのだろうか。杖をついてやつと歩けるような、ひ弱な人間になど、なりたくない。剣を扱えぬどいか、走る」とやめてまならないではないか。

「ひどいとはしないわ。あなたの質問も、答えるかい。ね？」

「あ、とやうて手をさしだすフーシャに、ヴィレンはおれるおるの剣をおたみると、手をだした。

フーシャはまた目をほそめて笑うと、手当をはじめた。

木箱から出された白い布は、包帯だろつか。見知らぬものばかりだが、手当をする道具だと「う」とは、ヴィレンンドにもわかつた。

「なぜ、俺が異界からきたとわかつた」

「簡単よ。あなたがまだ、子どもだから」

「子どもが、珍しいのか」

「そうね。ここは、大人の国だから」

「大人の国？」

「そう。ここには、子どもはいなーいわ。みんな、生まれたときから大人の姿なのよ」

ヴィレンンドは、考えた。

（つまり、自分のいた世界とは、違つたことわりをもつ異界ということだらうか）

子どもだけだったヴィレンンドの世界とは反対の、大人だけの世界。

「驚かないのね」

「俺の世界に、大人はいなかつた。反対の世界があつても、おかしくはない」

「そう、それでわたしを見て驚いたのね」

「お前はなぜ俺が子どもだとわかつた。この世界に、子どもはいないのだらう？」

フーシャが傷口に液体を垂らした。途端に、傷口に裂くよつな痛みが走つた。

「がまんしてね。消毒をしているの」

「問題ない。それより、はやく答える」

「昔ね。まだわたしが若かったころ、会ったことがあるの。その子ども、異界からきた子どもだったわ。あなたと同じね」

「……その子どもは、どこにいる」

フーシャの、視線がさがつた。

かすかに浮かべていた微笑も消えて、その瞳にかなしげな色が宿る。

「その子は、今のあなたよりももう少し成長してたわ。でも、よく似てる。身体は子どもなのに、とても大人びていた。生まれて二年しか経っていないわたしよりも、ずっと大人なひとだったわ」

そこで、フーシャは一度言葉をきつた。

「……どうした」

「主人だったの。わたしの、夫だったのよ。でも、連れていかれてしまった」

「連れていかれた？」

「この世界は、大人ではない人間を受け入れないの」

そう言つて、フーシャは静かに涙をながした。

ヴィレンドは、そんなフーシャを見つめながら、彼女が今言つた言葉を考える。

大事なのは、彼女が今いつた「大人ではない人間を受け入れない」という言葉。

その言葉が本当ならば、この世界はヴィレンドにとつて生活しきい環境ということになる。

子どもの姿である自分は、この世界で暮らすどころか外を出歩く

「どうやれでできない」と「う」と「だ」。

フーシャは、鼻をすすると涙をぬぐつた。

「神の子、って呼ばれる人たちがいるの。科学じゃ説明できない、特別な力をもつひとよ。そのひとたちが、この世界をつくっているの」

「どうこうことだ。神の子が、法王なのか」

「ホウオウ、というのは知らないけれど。神の子が、この世界のすべてを決めているの。神の子が、大人しか受け入れないと言つたからには、わたしたちはそれに従わなければならなかつた」

「だが、お前は前に会つた子どもを、オットにしたのだろう」

「そう。愛したの。彼を愛してしまつたから、そばにいてほしかつたのよ」

フーシャの目から、ぬぐつたはずの涙がまた、あふれた。
皺だらけの顔がいつそう、皺だらけになる。

「だから、もう繰り返さないの。あなたは、わたしが守るわ。けれど、感謝とかそんなのしないでいい。これは、わたしの夫への罪滅ぼしなの。あのひとを守れなかつた、わたしの」

「意味がわからない。俺は、オットになるつもりはない」

フーシャは細い目をみはつた。かと思うと、なにがおかしいのか突然笑い出した。

「そうね。こんなおばあさんだものね」

フーシャは、ヴィレンンドの手に包帯を巻き始めた。

「手当が終わつたら、少し休むといつわ。わたしのベッドを使つて」

「ベッド？」

ヴィレンドは、部屋をみた。見たかぎり、ベッドとお皿しきもの
は見当たらぬ。

「奥の部屋にあるから、あとで案内するわ。お腹も減つてるのでしょ
うから、なにか食べ物も作らないと」

「……嬉しそうだな」

「ええ。この歳でまた、こんなにドキドキする」とが起るなんて、
わたしは幸せものね」

そう言って、フーシャはいつも嬉しそうに笑つた。

ヴィレンドは、手当の終わつた右手を見た。反対の腕を、という
フーシャの言葉にしたがつて、もう一方の腕も差し出す。

パルスは、ヴィレンドがどの異界へいくかはわからないと言つて
いたが、もしかするとこの「大人の世界」のほかにも、異界がある
のかもしれない。

けれど。どれだけこの世界が自分にあつていなくとも、もう来て
しまつた。

ここで自分は、生きて行かなければならない。命をかけてヴィレ
ンドを逃がした、パルスのためにも。

（そのためには、協力者が必要だ）

ヴィレンドは、ちらりとフーシャを見た。このフーシャという大
人は、ヴィレンドを守るといった。

本當か嘘かはわからない。だが、この世界のことわりについて知
るまでは、この者のもとで学ぶべきかもしだい。

（危うくなれば、逃げればいい）

もしもフーシャがヴィレンドを神の子へ渡そうとしたら、そのときは鍵をつかおう。

例えそれで、この人間や、この世界が、どうなったとしても。

命の樹と呼ばれるそれは、国の中心にあるところ。

そこから「大人」が生まれ、そして歳をとり、「死」がやつてくれる。

「死とはなんだ。いや、国とはなんだ」

「国はね、人々のあつまつなの」

そう言って、フーシャは地図を見せた。

「こ」、とフーシャが指でつづいた先には、緑の線で囲われた場所があつた。さらに細かく、赤や黄色で中が幾つかに区切られている。

「緑の線で囲っているのが、この世界すべてなの。中をそれぞれの色で区切つてあるのが、国」

「集落みたいなものか。この緑の線のそとには、なにがある?」

「海よ」

「ウミ?」

「全部、水つてこと。この世界の外は、海ばっかりらしいわ。海は広くて綺麗で、塩の味がするらしいけれど、わたしは見たことがないの」

「ウミ、といつのは、よくわからないが。だが、この国はこの地図に描かれているものがすべてなのか」

黄色の線で囲われた国の丁度中心に、見えるかみえないかほどの点がある。神殿といつらしく、神の子がすまう神の城らしい。

フーシャによると、神殿はこの家とは比べ物にならない大きさだといつ。

（ならば、この国といつ集落は、とても巨大だ）

フーシャが使った水や火をだす力といい、この世界はヴィレンドの世界よりも、数段進んでいるようだ。

この世界へきて、まだ一日しか経っていない。

ヴィレンドは、フーシャからきくこの世界の事実に、おどろくばかりだった。

そう、ヴィレンドの得ている知識はすべて、フーシャから『えらべて』いる。

本当に彼女の話す言葉が真実なのかはわからないが、少なくともフーシャに敵意はみられない。そう、ヴィレンドは判断していた。

「ねえ、ヴィレンド。あなたの世界の住人は、死ぬことはないの？」
「さつきも言つたが、死の意味がわからない。意味のわからぬものを、答えることはできない」

「人は、死ぬのよ。身体が動かなくなつて、意識がなくつて、心臓も止まつてしまつ。身体だけを残して、魂が神様のもとへ帰るの」「なんだそれは。置いて行かれた肉体はどうなる？ 食べるのか」「まさか、食べないわ。お墓をつくつて埋めるわね」

ふむ、とヴィレンードは考えた。

軽く顔をあげて、机をはさんだ向こう側にいるフーシャから、窓辺へと視線を向けた。ガラスの向こうで、青い空を飛ぶ鳥がみえる。

「ひいらの世界にきてから、よく見る鳥だ。

「なるほど。旅立つことを、死とこうのか

「旅立つていうの？ なんか、素敵ね」

「我ら子ども以外はみな、そのように肉体を残して動かなくなる。たとえば、ウサギ。それに、鳥だ」

獲物をつかまえ、それを食べるとき。ヴィレンードの世界では、「命が旅立つ」として、祈りをささげる。

それと同じなのだろうと、思った。残された肉体は、生きるもののは血肉となり、生きる糧をあたえるのだ。

「だが、我ら子どもが旅立つことはない。我らは、ひとつそりと消滅していく」

ヴィレンードは、視線をまた、フーシャに戻した。

フーシャは意味がわかつていないので、軽く首をかしげてみせた。

「我らは命の樹から生まれる。そしていずれ、消えていくのだ。身体も残らぬ。残るのは、その者を知っている者たちの記憶だけだ」

何度か、消えて行くものたちをみたことが、あった。
なんの予兆もなく、それは突然やつてくる。

「そうなの。なんか不思議ね。この世界の常識が、あなたの世界で

はまつたく違つなんて

やうに言つと、フーシャは立ちあがつた。

時計といつ機械をみれば、昼が近い。

「そろそろお昼ご飯の支度をするわ。手伝ってくれる？」

「わかった」

杖をついて歩いて行くフーシャの後ろ姿を見つめ、ヴィレンンドはそつと目を伏せる。

(これからどうするべきなのか)

「」の「」、ヴィレンンドはフーシャの家からでたことがない。フーシャは「外に出てみない？」とひんぱんに進めてくるが、ヴィレンンドはそれを断つていた。

布をかぶれば大丈夫だとフーシャはいうが、子供もの身なりである自分の存在が知れれば、大事になりかねない。

(まだ、そのときではない。もつ少しの世の常識を知つてからだ)

「たまごを取つてくれる？」

「いくつだ」

「一個よ」

ヴィレンンドは冷蔵庫から、たまごを取り出した。それを、棚におかれた器にいれてフーシャへ手渡す。

冷蔵庫は、食べ物を保管する機械だ。これもまた、ヴィレンンドのいた世界にはなかつたものだ。

ヴィレンンドは、パンの準備をしながら考える。

「この世界でも、主食はパンだ。そして、ヴィレンンドがいた世界と同じ言葉を使う。夜に眠り、昼間活動する。

切り分けたパンを皿に乗せ、机に置かれた新聞を退けた。新聞という情報誌には、細かに字が書かれているが、それをヴィレンンドは読むことができない。

（言葉は同じだが、表現する字は違う。それは、「子どもの世界」と「大人の世界」に住む人々が、独自の字をつくりあげたからではないだろうか）

つまり、もとは同じような世界だった可能性がある、といつてだ。発展する方向や速度が、違つだけなのだろう。

そうなれば、文化の進み具合からみても、大人は子どもよりも優れているのだろう。

ならばなぜ、「子どもの世界」では、大人の存在がことわりをくずすと言われているのだろうか。

（といつても、すべて憶測でしかないが）

「ねえ、ヴィレンンド。午後からは、字の勉強をしましょうか」

フーシャが、たまごをフライパンに割りながら言った。

「読み書きができたほうが、都合がいいでしょう?」「頼む。この世界の文字は、わからない」

ヴィレンンドはそつと息をはくと、考えを頭の中から追い出した。早く馴染まなければという思いばかりが、先走っていた。

昼食を食べ終えると、台所という大きな長椅子のような場所に、皿をおいた。

いつもフーシャは、ここで料理をする。どういう仕組みかわからないが、これは水や火をだす機械なのだといつ。

ヴィレンドは、自分に宛がわれた部屋へと戻った。今は使われていない、フーシャの「夫」の部屋だ。

椅子に座ると、背もたれに深くもたれかかった。

一人になると、安心する。とても疲れていた。緊張と焦りと、警戒。徐々に、フーシャに対して気を許しはじめた自分に気づくたびに、己に注意する。

（戻りたい、あの世界に。なんの変哲もない、日常に）

ここにいるを強く持たねば、生きていけない。それはわかっている。わかっているが、ヴィレンドは帰りたいと思つてしまつ。

（戻る世界も、ないとここのこ）

2、下市民

ヴィレンンドは遠くにみえる大木を見つめ、目を細めた。

そのとき、すぐ近くに人がきた。目深にかぶつたフードの裾をひっぱって、顔を隠す。

目の前にある銀色の柵は左右にどこまでもつながっており、その手前にはヴィレンンド同様、多くの人々が同じ方向を見つめていた。

ヴィレンンドは、そつときびすを返した。

少し離れたところにある電柱にもたれている、フーシャのもとへと歩み寄る。気づいたフーシャが、にっこりとほほ笑んだ。

「どうだつた？ 見れた？」

「見れたが、随分と遠い。それに、思つていたよりも小さいな」

「あら、そうなの？」

ヴィレンンドは、もう一度柵の向こう側をふり返った。

銀色の柵の向こうに、巨大な建物がみえる。神殿と呼ばれる神の子たちが住まう場所であり、この国の中でもある。

その神殿の中央からは、巨大な大木がその身体を天へと突き出していた。

根元は神殿の壁にさえぎられてみえないが、太い幹や生い茂る緑の葉は、遠目からでも十分みることができた。

「俺のいた世界の命の樹は、天に届くほど背が高かった。ここの中の樹

は、それの半分以下だ

「じゃあ、あなたの世界の樹のほうが、早くに生まれたのかしらね」

のんびりと言つたフーシャの言葉に、ヴィレンンドは驚いて振り向いた。

額に手を当て、ふむとうなづく。

「そりかもしれない。命の樹も成長するし、あちらの樹が先に生まれたといふとか」

ヴィレンンドは、ポケットから手帳を取り出すとカラカラとメモを取りつた。

「さて、なにか買って戻りましょうか」

「ああ。気をつける、足元に段差がある」

「はいはい」

フーシャは、杖を突きながらゆっくりと歩き出す。

「ここ一年ほど、彼女はあまり出歩かなくなつた。料理や洗濯、掃除などの家事もすべて、ヴィレンンドがしているほどだ。

ヴィレンンドはフーシャの隣に立つと、空いている方の手を支えた。

「あらあら、ありがとう」

「ホテルに戻つたら、薬を飲んで少し休め」

フーシャは、ただ笑つた。

ヴィレンンドは彼女から視線を反らし、フードを深くかぶつたまま、注意深く辺りを観察した。ここは観光地でもあり、人の数が多い。

はじめてフーシャ以外の人間を見たとき、そのおかしな服装に驚

いたものだ。そして同時に、フーシャの着ている衣類がとても簡素だということを知った。

こうして見る人々の服は、とても凝っている。様々な色を組み合わせたものがあれば、小物がついたものもあり、生地が少なく肌を露出させているものもある。

それはオシャレと「ものらしさ」が、フーシャはそれをしない。できないのだ。

「大丈夫か。もうすぐ、ホテルだ。おぶるうか？」

「大丈夫よ。歩けるわ」

また、フーシャは笑う。

ホテルの部屋に戻ると、ヴィレンドはフーシャを椅子に座らせて、薬を用意した。

「足は痛むか。腰は？」

「大丈夫」

「うそをつくな。ホットパックをつくる、横になつていってくれ」

ヴィレンドは、洗面台へ向かうと備え付けのタオルを手に取った。このホテルには、客用にタオルや歯ブラシまでもが、備え付けてある。客はそれを、好きに利用していくことになつていいらしい。

ホテル　ヴィレンドがいた世界でいう、借り宿は、お金を払えば止まれる宿場である。

ヴィレンドは、ポットから熱湯をだし、それにタオルをひたした。ホットパックとは、湯たんぽかわりになる温めたタオルのことだ。

出来上がったホットパックをビニールで包み、フーシャの元へ戻つた。

彼女は、ベッドに寝こんだままゆつたりとした寝息をたてており、起こすのも忍びない。

ヴィレンンドは、ホットパックをフーシャの腰の下へと滑り込ませた。

（フーシャは、疲れている。とても、とても）

この世界にきて、「老い」「死期」というものを知った。そして、フーシャに「死期」というものが近づいているだらうことも、感じていた。

ヴィレンンドは、子どもの姿から、がっしりとした大人の姿へと変貌しつつある。だが、フーシャの肉体は反対に衰え、小さくなつていいく。

その変化を間近で見ていると、どうしても居た堪れない。

ヴィレンンドは窓边にある椅子に座り、今日書きためたメモを見返した。

この世界にきて、もう五年の月日が流れようとしていた。

この五年、ヴィレンンドはこの世界のことわりを知るために、全力を尽くしてきた。そして、この世界の理を知ればしるほど、異界の成り立ちについて興味を持った。

命の樹とは、一体なんなのか。そして、子どもの世界や大人の世界によって、身体の発達や死のあり方が違うのは、なぜだろう。

もしかすると、「子どもから大人へなる間の人間だけの世界」というものもあるのかもしれない、とヴィレンンドは考える。

「ん……痛」

フーシャが、苦しげに息を吐いた。

ヴィレンンドはメモをしまうと、フーシャの元へ行って寝がえりを手伝った。背骨ごと背中が曲がったフーシャにとつては、寝がえりひとつ苦痛なのだ。

フーシャの寝息が穏やかになつたのを確認して、ヴィレンンドはまた窓辺の椅子へ戻つた。

カーテン越しに外をみれば、神殿の一部が見える。命の樹は反対方向なので見えないが、ここから確認できるだけでも「神殿」が巨大であることがわかつた。

(神殿か。あの中に、神の子がいるんだ)

『首都にいきましょう』と、フーシャが言いだしたのは、一週間前。なにを思い立つたのか、それは突然だつた。

今のフーシャの身体で泊りがけの遠出は厳しい。もつと暖かくなつて、身体が落ち着いてから行こう。そう言つたヴィレンンドに、フーシャは首を横にふつた。

「今行きたいのよ。あなたも、命の樹を見たがつていたでしょ?」「首都までは、馬車を乗りついでも二日はかかる。駄目だ、馬車の揺れは腰に悪い」

「あら、わたしの心配をしてくれるのね。大丈夫よ、大丈夫です」

頑固者のフーシャは、そう言つて譲らなかつた。

これまでコシコシと溜めてきた貯蓄をはたいて、今回の首都への旅にでたが、やはりといつも、フーシャの顔色は悪い。

なぜ、こんなに苦しんでまで首都へ来たかったのか、ヴィレンドにはわからかねた。

（彼女が望むならば、叶えてやりたい）

そう思うが、もしフーシャが近しい未来、この世から姿を消してしまつたら、どうすればよいのだろう。身体は大人になるし、ひと氣の少ない「村」と呼ばれる集落でならば、暮らしていくこともないだろう。

前にいた子どもだけの世界では、共に暮らす習慣がなく、みんながひとりで暮らしていた。ヴィレンドも、ずっとひとりで生活してきた。だから、ひとりでの暮らしが慣れている。

「……慣れとは、恐ろしい」

フーシャと暮らした五年は、とても楽しかつた。ひとりでいるよりも、ずっとずっと楽しい日々だつた。決して楽な生活ではなかつたが、共に野菜を栽培し、料理をして、この世界のことについて語りあつた。

ひとりよりも、ふたりでいる方がずっと楽しい。だから、この世界の人々は「結婚」するのだらつ。

フーシャが教えてくれた「愛」や「恋」はまだよくわからないが、それでも「結婚」することや、「夫婦」になる意味が少しだけ、わ

かつた気がした。

*

翌日また、命の樹を見るために、銀の柵の手前まで足を運んだ。フーシャがそれを、切望したからだ。だが、人の多い銀の柵近くまではいかず、今日も電柱にもたれた姿で、神殿をながめている。

「なにか、神殿にあるのか
「神の子がいるわ」

フーシャはそう言ひて、優しげに田をほそめた。その田は真っ直ぐに、神殿へ向いている。

(フーシャは、神の子に想い入れでもあるのだろうか)

ヴィレンドは、この世界にきてから神の子をみていない。神の子はなにか不祥事がおきた場合にしか、市民の前には現れないというから、見たいとも思わなかつた。

「歳をとると、田が見えなくなつてくるの。でもね、不思議なことに、遠くのものはまだよくみえるのよ

「神殿はみえるか」

「みえるわ。命の樹もみえる。あそこで、わたしは生まれたの。ほとんど、覚えていないけれど」

もうすぐ、春がくる。

神殿のふちを囲むよしに並ぶ、桜の木があつた。あと数ヶ月すれ

ば、満開の花びらをつけて人々の目を潤すのだ。

「ヴィレンド、あなたはもう少ししたら、そのマント無しでも出歩けるようになるわ」

「そうだな」

「ひとりでも、生きていけるわ」

ヴィレンドは、フーシャをみた。

驚いた表情のヴィレンドをみて、フーシャはくすりと笑った。

「「めんなさい。わたしの、わがままなの。あなたに会えて一緒に暮らすほど、あのひとを思い出してしまった」

「夫だった、者か」

「やつ。あのひとはきっと、神殿にいるの。いまも捕えられたまま、この世に生きているって、やつ、信じてる」

（ああ、やつこうとか）

ヴィレンドは納得した。

フーシャは、夫であった男に会いにきたのだ。

それは恐らしく。自らの死期が近いということを、悟ったからだろう。

きっとこれが、最後の旅になる。無理を押してここまできたのは、歩けるうちに愛する人に近づきたかったのだ。たとえ、その姿を見ることができなくとも。

（愛、とはなんだろ？）

ヴィレンドも、広大な神殿の建物を見つめた。そして、決して見

「わたしのできない、あの壁の向こう側を、想像した。

「わたしが死んでも、ねえ、ヴィレンダ。あなたは、ずっと生きていね」

「俺は生きる」

「よかつた」

出会ったころは、彼女がいつも裏切るともしないことを誓え、常に警戒していた。そんな自分を、ヴィレンダは恥じる。

「そろそろ行きましょうか。馬車に、乗り遅れてしまつ

フーシャが、腕につけた時計をみて言つた。そうだな、とヴィレンダも頷いて、その腕を支えようとした。そのとき。

横を通り過ぎようと歩いてきた男の鞄が、フーシャとぶつかった。そのはすみで、フーシャがバランスを崩し、その場に転倒した。ヴィレンダは咄嗟に手を伸ばしたが、遅かつたようだ。

「フーシャ！」

歳をとれば、骨も弱る。今のフーシャの身体では、腕をついただけで骨折をしかねない。

倒れ込んだまま動けないでいるフーシャを、慌てて抱き起しす。

しかし、その表情は苦痛に歪んでいる。

「どこか痛むか？ 腕か、足か」

「手首が、少し。あと、足、かしら。大丈夫、少し休めば治るわ」

人前ではしたないとつたが、ヴィレンダはフーシャのスカート

を押し上げて足を見た。一目でわかるほど、真っ赤に腫れていた。

(……駄目だ、折れている)

「手首は、どうだ？ 動くか」

「つ、痛い」

手首は腫れていない。しかし、痛みで満足に動かすことが出来ないようだ。

(まことに)

どこのか、フーシャを見てもらえるところへ行かなければ。
病院という、怪我や病気を診てもらう施設が、この世界にはある。
高額なお金が必要となるが、そんなことを考えてはいられない。

(病院は、どうだ。早くつれていかなければ、フーシャの命にかかる！)

ヴィレンードは、フーシャを抱き抱えて立ち上がった。
そのとき。

「うわ、汚いのにぶつかった！」

不意にきこえた言葉に、ヴィレンードは立ち止まつた。みれば、フーシャにぶつかった男が気持ち悪いものでも見るような田で、フーシャを見ている。

「ちょっと、やだあ。アンタ、きたなーー」
「俺だつてヤダつて。うへえ、この鞄もつ使えねえ」
「つていうか、なんで神殿前に下市民がいるわけ？」

男と、その連れだらうつ女が話している。

ヴィレンンドはその言葉をきいて、怒りにふるえた。

下市民といつのは、フーシャのことだ。

この世界には階級といつものがあり、人々はそれぞれその階級に振り分けられる。

一番偉いのが、神の子。そして、王族、貴族、平市民、下市民がある。ほとんどの者たちが平市民として生まれ、罪を犯したもののが下市民に落される仕組みになっていた。

フーシャがおしゃれできないのも、そのためだ。

下市民は一目でわかるようにするため、国から支給されるチュニックの着用が義務づけられている。

「いいから、大丈夫。ね、ヴィレンンド」

フーシャが言った。その苦しそうな表情に、病院が先だと判断して、きびすを返す。

フーシャももとは、平市民だった。だが、異界からきた子どもを置い、黙つて夫としたことを罰せられ、下市民に落されたといつ。

生活が苦しいのも、そのせいだ。下市民は職にもなかなかつけず、まわりからは差別されて生きてゆかねばならない。

ガツ、とヴィレンンドの頭になにかが当たった。

落ちたそれを見れば、石だった。

「つせゐ、罪人」

誰かが言った。やつきの、男女じゃない。

ガツ。

また、ヴィレンンドの頭になにかが当たった。あたつた場所が、じんじんとにぶい痛みを発する。ヴィレンンドは、悔しそうに顔をかみしめた。

(ここ)で怒つては、ことが大事になってしまつ)

悔しれと怒りを押し殺し、その場から立ち去る。再び歩き出す。そのとき。今度は本が飛んできて、ヴィレンンドの頭をかすめた。

その拍子に、被つていたフードがずれた。

あわてて抑えようとしたが、両手はフーシャを抱きあげていて塞がつている。あつという間に、ずれたフードはすとんと背中に落ちた。

(しまつた!)

しん、と周りが静かになつた。

口ぐちに暴言をはいていた人々は、素顔が露わになつた、ヴィレンンドをまじまじと見つめている。

「なにあれ」
「ばけもの?」
「やだ、きもちわるい」
「もしかして、あれって、子どもなんじや」

徐々にざわめきが広がり、神殿をみていた観光客までもを巻き込

んで大きくなつていぐ。

「いけないわ。ヴィレンド、逃げて」

フーシャが言った。

「ああ、わかつて、」

頷いた。ヴィレンドだったが、フーシャの顔色の悪さに心配がよつとした。

（まよい、早くフーシャの怪我を……）

焦りを押忍えて一歩歩き出すと、周りから悲鳴があがつた。

「子どもがいる。」

「捕まえてくれ、はやく。」

あいつとこゝ間に、蜂の巣をついたような騒ぎだ。その騒ぎの乗じるよつて、ヴィレンドは入込みに飛び込んだ。

だが、顔が見えてしまつてことと、フーシャを抱き抱えていることもあり、とても立つ。

逃げまどつ人々は、ヴィレンドをみると口をあげ、「子どもがいる！」と場所を示した。

逃げる方向を考えるため、ヴィレンドは一度立ち止まつた。しかし、こちらへ向かつて走つてくるねずみ色の制服を着た男たちを見て、あわてて反対方向へ走る。

「まよい。警備兵だ」

「ヴィレンド、わたしをおいて逃げて。目立つし、邪魔になるもの
「駄目だ、置いてなどいけない」

一度罪をおかした下市民が再び罪を犯せば、厳しい処罰がまつて
いる。

(どうすればいいのか)

ヴィレンドは悩んだ。フーシャは今、怪我をしている。高齢での
怪我は命の危険につながり、すぐにでも医者へみせたい。

だが、今の自分にはそれができない。

かつては、大人の姿に変わつていく我が身が恐ろしくて仕方がな
かつたが、今は子どもの身である自分が悔しくてたまらない。

たくさんものをくれたフーシャに、自分はなにもできない。

前からも、警備兵がきた。神殿前といふこともあり、警備の対応
が早い。さらに方向を変えて逃げるが、すぐに足を止める。

(駄目だ、完全にはさまれた!)

そう思つた瞬間、とつぜん足に力が入らなくなつた。

ヴィレンドはその場で膝をついた。みれば、足首の上あたりから、
真つ赤な液体が服をぬらしている。血だ。

「殺すな、捕まえろ」

男の声がした。

顔をあげると、ねずみ色の服をきた男たちが一定の間隔をあけて、

ヴィレンンドたちのまわりと囲んでいた。平市民たちは避難したのか、あたりにはほとんどない。

広い神殿前にいるのは、ヴィレンンドたちと警備兵だけとなつた。

(せめて、フーシャだけでも逃がすことができれば)

ねずみ色の制服の上に、紺色の上着をはおつた男がひとり、近づいてきた。

右手には銃　　「この世界の武器だ　　をもつており、ヴィレンンドへ向けられている。あの銃といつ武器は、とても強力だ。

本でしかみたことがないが、人をあつといつ間に殺してしまつほどの威力だという。

突然足に走つた痛みは、あれで撃たれたからかもしれない。

銃をヴィレンンドに向けたまま、男はすぐ近くまできた。

「お前は、子どもか」

「ちがう」

「その老婆は、知り合いか」

「ちがう」

さつぱつと答えたヴィレンンドに、男はさすがに笑つた。

「こつらを、捕えろ」

男の言葉と同時に、周りを囲つていた警備兵たちがヴィレンンドを取り押さえた。警備兵のひとりが乱暴にフーシャを奪い取り、その肩にかつぐ。

「やめろっ、怪我をしてるんだぞー！」

怒鳴った瞬間、頭ににぶい痛みが走った。視界がぼやけだし、強烈な睡魔がきたように瞼が重くなつた。

目をとじる寸前。

最後に、フーシャのほほえむ顔をみたような気がした。

3、イノチ

（痛い、なんだ！）

足に走った激痛で、目が覚めた。

誰かが足を締め付けていた。とつそにそれを蹴りつけて、ヴィレンンドは上半身を起こした。手に硬いものが触れて、石畳みの上で眠っていたのだと知る。

「痛たたた、突然蹴るやつがあるか。腰に響いたらどうするんだ、まつたく」

辺りは薄暗かつた。わずかに電球からもれた光が、目の前の人物を照らしているが、よく見えない。

わかったのは、ここが牢屋の中であることと、誰かが一緒にいることだった。

そしてそれがフーシャではないといふことも、相手の低い声でわかつた。

「何者だ、男」

「手当してやつたんだぞ、感謝くらいしきよなあ」

男が、ヴィレンンドの足を指した。血が流れていた方の足だ。今は汚いボロ布が巻かれ、血は止まっている。

それを認めて、ヴィレンンドは素直にあやまつた。

「そうか、すまない。……貴殿は、だれだ」

「自分から名乗るもんじやねえのか。まあ、いい。俺は、ボックス」

ボックス、と名乗った男は、ゆっくりと近づいてきた。

咄嗟に構えて、懷に忍ばせている護身用の剣をとりだす。どうやら、剣は取りあげられなかつたらしい。

男が近くまできたとき、はじめてのその顔が見えた。
ぱさぱさの白髪に、伸び放題の白いヒゲ。そして、垂れ下つた皺だらけの肌。

(老人か？ しかし、随分と元氣に見える)

かなりの「」老体だとこいつとは一寸でわかつたが、フーシャのよつて聲は曲がつておらず、その皿は生氣に満ちている。

「お前の名前は？」

「ヴィレンド」といつ

ヴィレンドが答えると、男はふむと頷いた。

「ヴィレンドか。懐かしい名前だなあ

「懐かしい？」

「俺がもといた世界の友人に、そんな名前のヤツがいたんだ」

そう言って、男はすぐ皿の前に座つた。

「お前も、子どもの世界からきたのか」

お前も、とこいつは葉に、ヴィレンドは皿を開いた。

(つまつ、この男もヴィレンドと同じよつて、子どもだけの世界からきた、と言つのか)

「はつは、これはいい。まさか、同じ世界からきた者がいるなんてなあ！」

「貴殿も？ ほんとうに？」

「そうだ。ああ、なつつかしいなあ！ あつやは相変わらず、法王がしきりとるのか」

ボックスは侮蔑を露わに吐き捨てる、ヴィレンンドに筒を差し出した。

とつやに受け取るもの、それを持ったままどうするのもできず、に固まる。

（なんだ、これは）
ヴィレンンドの考えがわかつたのか、ボックスはつけたすよつに言った。

「水だ、飲め。ここは牢屋だ、強がっててもしゃーないだろ。仲良くやうひやあ」

ははは、と豪快に笑う男を、ヴィレンンドはまじまじと見つめた。歳だとうに、その動作はとても若々しい。それはヴィレンンドにとつて意外だった。

フーシャは勿論、フーシャ以外に見た老人はみな、身体の機能はおとろえ、弱弱しい印象があつた。その分知識が豊富であり、その知識と引き換えに、身体が弱つていく。

それが老いとつものだと認識していたが、ビリヤーは違つようだ。

「ビリヤーは、どこだ」

「ビリヤーにみえる？」

「牢屋だ。おそらく、地下にある
「そいつ。よくわかつたなあ。ここは、罪人が捕まつたる牢獄だ
な」

廊下にも部屋にも、窓がない。それが地下だと思った理由だった。灯りとしての小さな裸電球があるだけで、それも廊下にひとつぶら下がつていいだけだ。

「連れがいた。どこにいるかわかるか」

「そいつも、子どもの世界からきたのか？」

「いや。こちらの住人で、下市民だった」

「あー、だったらもう、生きちゃいねえだろ？」

あつけらかんと言い放つた男を、力いっぱい睨みつけた。そんなヴィレンドに臆しもせず、ボックスは軽く肩をすくめてみせた。

「下市民が罪を犯せば、その場で酷い拷問がまつてゐる
「拷問だと？ ばかな、フーシャはもうかなりの歳だぞ！」

ヴィレンドは立ち上がりうとしたが、右足に激痛が走り、つまづくように転んだ。

（撃たれたところか、くそつー。）

「お前の足じや、動けんだる。それに、こつからは出られんし
「フーシャを助けないと。借りがある
「律義な男だなあ、君は」

牢をしきる鉄格子の傍まで這つていき、出られないかと手で揺すつてみる。鉄格子はびくとも動かず、抜け出せる隙間もない。

「ここに入つたが最後、一生出られんさ。それより、話しあう
じゃないか。人と話すのは久しぶりだ」

「話をしたら、俺をここから出してくれるのか」

「俺に言われてもなあ」

ぱりぱりと頭をかいて、ボックスは近くまできた。ヴィレンンドと
同じように鉄格子ごしに外をのぞくと、軽く首をふった。

「ほら、 ええと、出ることすらできん。むしろ自由。ここ
は囚人だ」

ヴィレンンドはそれには答えず、繰り返し鉄格子を揺らした。
もののはずみで外れるかもしれない、繰り返し揺らす。だが、
びくとも動かない。しばらくして諦め、別の脱出方法を考えた。
床下を掘つて逃げようか。いや、道具もなしに不可能だ。ならば
誰かがくるときを待ち、その者を倒して逃げるか。

「おーい、物騒なこと考えんなよ。無理だから」

「そんなことわからんだろ？」

ヴィレンンドは必死に頭を回転させた。

だが、殴られた頭の痛みと足の痛みのせいか、うまく考えること
ができない。気がついたらぱりぱりとしていて、身体もだるい。

「おい、君。ヴィレンンドー あーあ、そんな足で動くからだ。大
人しくしていろ、きこえているか？」

遠くで、誰かの声がした。早くここから出なければ、やつはいつの
に身体がうまく動かない。重くて、まるで水の中に浸かっているよ
うだ。

(「フーシャは、どこにいるのだらう）

「この世界にきて、フーシャだけが頼りだつた。異界からきたことを承知のうえで匿い、たくさんのこと教えてくれた。

（フーシャを探さなければ。早く、しないとつ）

重い身体を動かすが、沼に飲み込まれていくように身体が地面上に沈んでいく。

辺りは真っ暗で何も見えず、自分自身の姿すら見ることがかなわない。自分がどこにいるのかわからなかつた。

「ヴィレンド」

誰かが呼んでいる。

フーシャだろうか。それとも、パルスか。

「おい、起きろつーの。おお、目が覚めたか」

「……ボックス？」

「おー。意識はしつかりしてるようだなあ。熱はまだ下がらんが、気がついたんなら大丈夫だる」

熱を、出していたようだ。しかも、気を失っていたらしい。

額に手をあてると、濡れた布が置かれていた。黄ばんでいて汚い布だが、この男の善意だろうと思うとふり払うこともできない。

「嫌なら使わんでいい。しばらく寝とけ、まつたく」

「俺は熱を出していたんだな。どれくらいの時間がすぎた？」

「一晩ほどだ。食事が届いてるわ」

そう言って、ボックスは器と一欠けらのパンを差し出した。器の中には見るからに薄いスープが入っている。

食べたくなかつた。それよりも、早くフーシャを助けにいかなければ。

「食べたくないても、食べる。脱走するなら、尙更だらうが。口に押し込むぞ、いいか？」

「いいわけがない。……やめろ、痛い」

口元に押し付けられたパンを手で押し返して、ヴィレンドは上半身を起こした。かすかに動いた右足が、じくじくと痛む。化膿しているのかもしれない。

「やつぱりなあ、衛生的に悪いからな。言つておぐが、俺はしつかり手当してんだぞ？」

「わかつていい」

「そう落ち込むな。機會があれば、俺が逃がしてやるつて」

「できもせぬくせに」

「言つたな！ まったく、お前は失礼だな。俺はお前よりもずっとすげいんだぞ」

そう言つて、ボックスは「ヤレヤレ」とズボンを脱ぎ出した。それを見て、ヴィレンドは激しく顔をしかめる。

「用を足すなら、向こうだらう」

「ばつか！ ちがう。これだ、みる」

そう言つて、ボックスはズボンの内側から四角い板のよつたもの

を取り出した。大人の手のひらほどの大きさで、金色をしてる。厚さは小指の爪の半分ほどで、とても薄い。

「これはなあ、子どもの世界からここへ来るときこそ、俺がもつてきただものだ」

「盗人か、変態め」

「お前は口が悪いな。言っておぐが、俺は変態じゃないぞ、盗人は当たりずしも遠からずだが」

そういうと、ボックスはその薄い金の板を、指先ではじいた。

「これは、子どもだけの世界にあつた、宝のひとつだ。俺がまだ、神の子として法殿につかえてたときこそ、かつぱらつてきた」

「宝?」

ヴィレンドは、ボックスがもつ金の板をみた。そういうえば、パルスから貰つた鍵もこんな色をしていた。

ふと、ヴィレンドは考えた。

そうだ、鍵がある。鍵をつかえば、フーシャを助けることができるんじゃないだろうか。

パルスは、生死にかかわる願いはかなえられないと言つていた。そして、叶えられる願いはひとつだけだとも、言つていた。

ならば、一刻もはやくフーシャの無事を確認してから、何を願うべきなのかを検討する必要がある。

(まずは、ここから出られないことには、はじまらない)

「それを使って、ここから出られるのか?……まで、なんと言った? 貴殿は、神の子なのか?」

ヴィレンドは、ボックスの顔をみつめた。

(神の子? この、ボサボサ頭の男が?)

神の子という存在は希少で、子どもの世界でもまれにしか生まれてこなかつた。

その「子どもの世界の神の子」と、異界で会うなどといふことがあるのだろうか。

「ああ、そんなときもあつた。だが、やめたんだ。あの世界を知れば知るほど、うんざりしてたから」

ボックスは、少しばかり肩をすくめてみせた。

(栄えある神の子の地位について、気に入らなかつたのか)

ヴィレンドは、かすかに眉をひそめた。

「……どうことだ」

「おかしいとは思わんかったか? みなが子どもの姿でうまれ、知らずのうちに消えていく。だが、法王だけはずつと、あの世界に君臨しつづけていた。まるで、神のように」

「それが、法王ではないのか。法王は消えぬ、絶対的な存在だらう。だからこそ、法王であるのだ」

「不老不死が、絶対的な存在? それは自然の摂理に反しているんじゃないのか。それにな、あの法王がつくる子どもだけの世界つてやつは、どうも不自然すぎる」

「意味がわからぬ。あの世界にはあの世界のことわりがあるのだ

「うひ

「そもそも、ことわりってなんだ? 誰が決めた?」

「それは、世界が成り立つたときからの決まりでは? いや、待て。どうということだ。ことわりとはなにか、俺はよく知らない。たしかに、誰が決めたのかわからないが、ことわりが存在するの皆が知つていることだ」

「俺は、あの世界をおかしいと思つた。最初は思わんかったが、身体が大人になるにつれ疑問を抱いた。……なあ、お前も大人になつたからあの世界を追われたんじゃないのか？」

ボックスは、一度言葉をきつた。しん、と牢屋に静寂が落ちる。

「つまりなあ。大人の存在はあの世界のことわりをみだす、つて言うけど。それつて、大人になつたらあの世界に疑問をもちはじめる者が出てくるから、法王にとつて都合が悪くなるつてことだらう」

煩わしいものでもみるように、ボックスは金の板をみた。それを手の中であそぶように転がすと、とつぜんにっこりと笑つた。

「ま、それはそれだ。じつからの脱出方法なんだが、じつを使おうと思つ」

ヴィレンドは明らかに話しを変えようとするボックスに気づいたが、素直に頷いた。その話しも興味あるものだが、今はそれどころではない。

「それをどうする？」

「言つただろ。俺は、神の子だ。いつかここから出るために、神の子だということを隠してきたんだ、ずっとな」

ボックスは金の板をヴィレンドへ向けた。

板の端をツンツンと擦るように突くと、淡い金色の光を発しだす。パルスがヴィレンドを、この世界におくつたときと同じ色の光だ。ぎょっとして、ヴィレンドはボックスに掴みかかった。

「まで、この光は。まさか、異界へいくのか？」

「ちがーう。俺にそんな力はない」

薄暗い牢屋が、一瞬のうちに淡い金色の光で包まれた。目を開いているのに、前がまっ白に見えてしまつほど強烈な光りのなかで、なにかがヴィレンドの肩を掴んだ。

「おい、足大丈夫か。お前が歩けねえと助けるビーリングじゃないしなあ」

「問題ない。それより、何をした。何も見えない」

「もうすぐ見える」

ボックスの言つた通り、淡く包まれた光りは色を失つていき、再び薄暗い部屋へと戻る。

一瞬、もといた牢屋と同じ場所かと思つたが、鉄格子が見当たらぬ。先ほどの部屋よりも数段明るく、今にも消えそうな電灯が頭上で点滅していた。

どうやら違う場所に移動したらしい。

「ここはどこだ?」

「フーシャの近くだな。ここのはづかに、フーシャがいるはずなんだけど」

フーシャの家にあつた、リビングと同じくらいの大きさの部屋だ。そのなかを、点滅を繰り返す電灯の明かりだけを頼りに、見回した。積み重ねられたダンボール箱に、部屋の中に一定間隔で置かれた棚が数個。そのうえに、人がひとり入れるほどの木箱が綺麗に陳列されている。何かの機械だろう、鉄の塊が無造作にそこそこに置かれていた。なにかの倉庫のようだ。

(本当に、こんなところにフーシャがいるのか?)

「ヴィレンドは、辺りを見た。

しかし、綺麗に列をなす棚と、その上に並んだ木箱が部屋の大半をしめていて、人の姿などどこにもない。

「いない。ここではないのだろう」

「いや、ここだ。間違いない。俺がフーシャの場所を間違えるはずがない」

ボックスは、ダンボール箱をひっくり返しはじめた。荷物をどけ、僅かな隙間までも覗きこんで探し出す。

「ボックス、フーシャはねずみではない。そんなところ、いるはずがない」

「なあ、ヴィレンド。俺はいつでも牢屋から出れた。でも、出なかつたんだ。なんでかわかるか？」

すべてのダンボール箱を開け終えたボックスは、今度は木箱に手をかけた。ごと、と大きな蓋をはずして、中をのぞきこんでいく。

「俺が逃げれば、フーシャが罪を問われるからだ。だから俺は、逃げなかつた。あいつが生きていてくれたら、それだけでよかつたんだ」

「ボックスは、フーシャと知り合いなのか」
「俺の嫁だ。こつちへきて、知り合つた」

機械をながめていたヴィレンドは、驚いて振り向いた。ボックスの大きな背中が見えたが、その顔は見えない。

「ボックスが、フーシャの夫だったのか。異界からきた子どもを夫

にしたと、聞いたことがある

「そりゃあ、俺だ。フーシャはいいやつだった。いいやつ、すぎた」

次々に木箱のふたを開いていたボックスの手が、不意に止まった。

「……手遅れだつたか」

「ボックス？」

「お前は、くるな。もう行こう」

ボックスは、開いたばかりの木箱のふたをしめた。
ダンボールや木箱のふたを開いてはそのまま放りだしていたボックスが、その木箱のふただけ閉めた違和感に、ヴィレンドはすぐに気がついた。

ちょうど、人が入れるほどの大さの、箱だ。

「ボックス？ その箱は、なんだ。なにが手遅れなんだ」

「ヴィレンド。ここにいても仕方がない。フーシャは、俺たちを助けた。俺たちが生きねえと、フーシャに申し訳がたたん」

「あの箱はなんだときいてる！」

ヴィレンドはボックスを押しのけて、木箱の前に立つた。
その木箱に手をかけようとしたところで、ボックスに腕を掴まる。

「俺たちが逃げたことはもう、知られてるだろ？ 早く逃げねえと、手遅れになる」

「フーシャは、どこだ」

「いいかヴィレンド。この世界の住人は、死ぬんだ。それが自然の
摂理つてやつなんだよ」

ボックスに捕まれた腕をふりはらい、強引に木箱を開けた。ふたはとても重く、両手で抱えるようにして開いた。

中には、やはりというか、予想通り。フーシャがいた。少しばかり顔色の悪いけれど、変わらず姿でそこにあった。

「……眠っている」

「ちがう、もう動かない」

「手当てをした方がいい。フーシャは手首と足に怪我を」

「ヴィレンド！」

ボックスがヴィレンドの肩をゆすつた。静かな部屋にボックスの怒鳴り声が反響する。

「現実を、見る。もう手遅れだ。今はここを出ることを優先的に考える」

ボックスが、強引にヴィレンドの腕をひっぱつた。「」とると音をたてて、ヴィレンドが支えていた木箱のふたが落ちる。

「俺の力じや、移動ができねえ。当たりすんなよ
「フーシャを、連れて行かないのか」

ヴィレンドはかすれる声でつぶやいた。ボックスは部屋のドアから顔をのぞかせて、警備兵がいないか確認すると、無表情でふりむいた。

「連れてなどいかない。邪魔になる」

邪魔、という言葉に、ヴィレンドは頭を殴られたようなショックをうけた。言い返そぐと口を開くが、すぐに開いた口を閉じる。

(ボックスの言葉は、間違いない。今は、ここを出ることを優先的に考えるべきだ)

フーシャは、なぜ下市民になった？なぜ、こんな目にあつた？ボックスとヴィレンドを助けたためだ。ならばせめて自分たちが助からねば、フーシャがむくわれないのではないか。

「気持ちはわかるが、今は逃げようじゃないか。話しさ、それからだ」

ドアを出たとき、暗い廊下の奥から複数の足音が近づいてきた。ボックスは軽い舌うちをして、金の板をとりだした。

「それを使うのか」

「俺に次元を超える力はない。フーシャの元へこれたのは、この世界で知り合つたことがあるからだ。この世界に、俺にはほかに知り合いがいねえ。だが、頑張ればなんとかお前ひとりくらい、どっかに飛ばせるかもしれないだろ」

「次元を超える力とはなんだ。どうすれば、貴殿も一緒にいける？」

ヴィレンドの言葉に、ボックスはきょとんとしたように目を見はつた。かと思うと、次の瞬間、声をあげて笑つた。

「お前、俺を心配してくれてんの？いいやつだなあ、お前は。人を疑うこと知らんのか」

「そういうわけではない。だが、大恩あるフーシャが愛したという貴殿を見殺しになどできぬ」

「残念だが、次元を超える力つづーのは、生まれ持つた力と比例してるんだ。異界へ生きた人間をおくるなんて、それこそ最上級の神の子くらいしかできねえよ。まあ、扉の鍵があれば話しあは別だが」

鍵、という言葉に、ヴィレンードは我に返つたようにポケットをさぐつた。

（そうだ、鍵！）

冷たく硬いかたまりが、指先に触れた。そのかたまりを引っぱり出すと、それは紛れもなく金の鍵だ。

フーシャのために使おうと思っていたが、それが叶わなくなつた今、使う道はひとつだつた。

「おい、お前。その鍵はまさか時空の扉の鍵か

「知らんが、パルスという友人がくれた」

「見せてくれ」

ボックスが手を伸ばしてきた。その手に金の鍵を乗せてやると、反対の手で軽く頭を小突かれる。

「お前は！ 相手を警戒しようと言つただろ。俺がこれ持つて逃げたらどうすんだ！」

「御老体には負けぬ

「……あつそう

そういうしていいる間にも大勢の足音は近づいていた。見つかるのも、時間の問題だ。

「どうするんだ、その鍵を使うのか

「おうよ。この鍵はな、時空の扉の鍵つつて、時空の扉を唯一開くことができるしろものだ。実は俺も、この鍵を使って時空の扉をくぐってきたんだ」

「その扉というのは、どこにある？」

「エリにある」

ボックスは金の板を見せた。かと思うと、その側面に突然鍵を差し込んだ。穴などなかつたように見えたが、もしかすると隙間があつたのかもしれない。

ボックスは、突つ込んだ鍵をぐるりと回して見せた。
そのしゅんかん、金の板はまるで扉のように、中央から手前に開いた。

「……小さい」

「頑張つたら入れるだろ？ 足突つ込んでみたらどうよ」

「無理だろう。馬鹿じゃないのか」

「うつせ！ これは、別に入る必要はないんだよ」

ボックスが、金の板に差し込んだ鍵を引き抜いた。それとほぼ同時に、開いた小さな扉の内側から溢れんばかりの淡い光があたりに差し込み、ヴィレンードはボックスを見た。

「異界にいくのか

「たぶんな。どこにつくかは、わからんけど」

ボックスに重なつて、別の世界が見えた。前に一度、この現象を見たことがある。

まったく異なる、見たこともない世界が同時に目の前に広がるのだ。

そのとき、廊下の向こうにねずみ色の服をきた男たちの姿がみえた。なにかを叫んでいるが、同時にしゃべるものだから、よく聞き取れない。

「ほら、なくすなよ」

ボックスが、鍵を押しつけるように手渡してきた。

「その鍵、しっかり握りしめとけよ。俺、前のときその場に落してちまつてた」

「貴殿は、しつかりものだが抜けている」

「ははは、それ矛盾しすぎ！」

薄暗い廊下が、消えていく。一度だけ、後ろを振り返った。すぐ後ろに、靈安室、と書かれた部屋があった。

ドアの向こう側には、フーシャが永遠の眠りについているはずだ。ぐにゃりと歪んだ田の前の風景は、重なり合つた別の景色に紛れてきえていく。

戸惑う警備兵の姿も、靈安室の扉も見えなくなつていくなが、すぐ近くにいるボックスだけがはつきりと見えた。

やがて、霧がはれるように辺りの景色がくつきりとしてくる。同時に眩しい陽の光が顔に差し込み、ヴィレンンドは腕をかかげて顔をおおつた。

「森があ。移動成功つてとこだな」

ボックスのひょうひょうとした声に、ヴィレンンドは田を細めて辺りを見た。

そこは、麗しいほどどの緑が生い茂る、森のなかだった。少し離れたところに湖があり、水面で直射日光が反射して光つてみえた。水面から、数羽の鳥がとびたつた。大きな、白く美しい鳥だ。

「ijiは、子どもの世界か？ とても似ている」

「あな。決めつけることはできんが、懐かしいもんがあるなあ

ヴィレンンドは湖の傍へと寄ると、右手でその水を掬いあげた。透明感のある、綺麗な水だ。

「ヴィレンンド、足をだせ。手当てしてやるよ」

「ああ。すまない、頼む」

「あやまんな。こういうときは、ありがとうって言つもんだ」

ボックスは笑うと、ヴィレンンドの足を手当てしはじめた。その姿がフーシャと重なり、目がしらが熱くなるのを感じた。

大人の世界に移動してきたとき、フーシャも手当てをしてくれた。あのときは足ではなく手だったが、思い出される情景に、どうしようもない懐かしさと愛しさを感じた。

「どうした、逃げきれて安心したのか？」

「……人は、死ぬのだな」

つぶやいた言葉に、ボックスは苦笑した。大人の世界で、長い間生きてきたボックスにとって、死を目の当たりにするのは初めてではないのだろう。

初めて死をみたとき、どう思ったのか。どう感じたのか。聞きたいと思ったが、それはボックスを傷つけるような気がしてきくことができなかつた。

「俺がはじめて人の死をみたのは、大人の世界で知り合つた友人だつたなあ」

とつぜん、ボックスが言つた。

「つか、フーシャのお隣さんだつた男でさ。俺のこと、一緒にかくまつてくれて。んで、神の子らに殺された。あいつも、フーシャの

こと好きだったからな。だから、俺をかくまつた主犯だつて言つて、処刑されたんだ」

「ボックス?」

懐かしさと、わずかな悲しみの色をその目に宿し、ボックスは苦笑した。

「俺は、神の子のなかで力は低いが、珍しい力がある。読心力、つていうの? 人のこころが読めんだよ」

「俺のこころを、読んだのか?」

「悪い。だが、お前も神の子なんだろう?」

「は? いや、俺はちがう」

ボックスは、きょとんとした。

「そ、うなんか? いや、といふぢうお前の考へが読みとれんくてなあ。てつきり、神の子かと」ぱりぱりとひたいをかいて、その顔に苦笑を浮かべる。

「だが、あんまくよくよすんな。フーシャは歳だった。でも、最後にお前に出会えた。それは幸福なことだ。俺も、お前に会えてよかつたつて思ひやが」

ボックスは、ヴィレンデの足を巻いていた布を湖の水で洗いだした。ばしゃばしゃとう水音がまた、フーシャと出会ったあの池を思いださせて、胸をしめつけた。

「俺は牢屋にいたから、フーシャのことがサッパリわからなかつた。でもお前がきて、フーシャは最後に幸福な時間を過ごしたことを知れたらし、この世にもういなつてこともわかつた」

「それは、いいことなのか」

「当たり前だ。俺はもう、あの牢屋にいる必要がない。フーシャがいなくなつたなら、誰に遠慮することなく脱獄できる。現に、今脱獄してきただろ?」

ボックスがこする布は汚くて、なかなか綺麗にはならなかつた。それでも少し綺麗になつた布を硬くしづつて水氣をとると、その布をヴィレンンドに手渡した。

「もつてくれ。薬草を探してくれる」

「わかるのか」

「俺はもともと、診療担当の神の子だつたんだぜ」

ひらひらと手をふつて歩いて行くボックスを眺めていたが、その背中が見えなくなると、そつと目を閉じた。

(フーシャ、すまない)

目がしらが、熱くなる。

今まで、泣いたことはなかつた。身体が大人の変わると知つたときも、パルスがヴィレンンドを逃がすために罪を負つたときも、泣かなかつた。それはきっと、これから的生活を考えるあまり、悲しみにひたる余裕すらなかつたからなのだろう。

今度は、ボックスがいる。それはヴィレンンドにとつて、安堵と余裕をあたえた。

あふれてくる涙は、とても新鮮だ。しかし、あまり気持ちのいいものではない、とヴィレンンドは思う。

フーシャは、本当にヴィレンンドに出会つてよかつたのだろうか。大人の世界では、死後の身体はそこに残る。あの身体は、どうなるのだろうか。フーシャが前に教えてくれたように、本当に土にかかるのか。

(フーシャ、すまなかつた)

繰り返し、フーシャに対して心の中であやまつた。

フーシャは神殿の前で、神殿には神の子がいる、と言っていた。あれはおそらく、ボックスのことを指していたのだらう。あのとき優しく細められた目は、ボックスを見ていたのだ。まだ生きていると信じ、彼のことを思つていた。

（せめて、一目だけでも会わせてやりたかった）

自分の無力さが、身に染まる。思うだけで、なにもできない自分が、歯がゆくて仕方がない。

（力が欲しい。大切なものを守れるだけの力が）

ヴィレンドは、静かに涙を流した。
しばらくして戻ってきたボックスは、手にいくつかの草と石をもつていた。
すでにヴィレンドの涙は止まり、持っていた布も大分乾いたころだ。

よつこいせ、とかけ声をかけながら、ボックスはヴィレンドの前に座った。

「その薬草は知つてゐる。消毒作用があるとか」

「おおよよ。よく知つてんなあ。お前、子ども世界では神殿につかえてたのか？」

「そうだ。戦士として教育を受けていた」

「あー、なるほどなあ。だからそんなお堅いのか」

お堅い、という言葉に少しだけムツとする。せめて、真面目と言つてほしいものだ。

「診療担当の神の子はみな、貴殿のよつてひりやけでひりを装つて
いるのか」

今度は、ボックスの表情がひきつった。

口端を妙につりあげ、ヴィレンジをじつとじつとみる。

「お前は、妙に觀察力があるな。装つてゐる、つていわれるとは思わ
んかった」

「違うのか?」

「違わんけどな。お前はアリカシーつてもんがねえな。もつひよつ
と相手に氣を使え」

(どつちがだ)

悪態をつぐが、口には出さなかつた。もつとも、読心力があると
いうボックスには筒抜けなのかもしれない。

ボックスは、薬草を拾つてきた石の上で潰し始めた。
その作業をながめながら、どうしても浮かんでくるフーシャの顔
を必死で記憶の底へ沈めた。また涙が出そうになり、かたく拳をに
ぎりしめる。

ボックスはなにも言わない。ただ、おだやかな時間が過ぎた。
しばらくして、洗つたにも関わらず黄ばんだ布で患部が包まれ、
ヴィレンジの足の処置は終わつた。

「お前の足、ちゃんとした医療場でみてもらつた方がいいな。玉が
貫通してたのは不幸中の幸いだが、痕は確實に残るだろつ。縫つて
やりたいが、針も糸もない。牢でも血をとめるのが限度だつた、俺
つて名医だし」

「すまない。……こや、ありがとつ

「いひつて。まず医者を探したんだが、」こがなんの世界かわからん以上、きびしいな。医学が発達してたらいいんだが」

「森がある、といつ」とは我ら子供の世界のよつて、自然のなかで集落をつくって暮らしていのだろうか」

「さあな。」この森が住みかなのか、それとも別に街があるのか。立てるか?」

「問題ない」

ボックスはヴィレンドの腕を支えながら、先に歩き出す。うながされるようにして、ヴィレンドも歩いた。

「さつき、向こうで煙をみた。人はいるだらうが、俺らを受け入れてくれるかわからん。用心しろよ」

「ああ」

足を浮かせながら歩くが、じくじくとじびれに似た痛みは、酷くなつてゐる。

だが、歩けないほどではないし、痛みに苦しむほどじやない。多少熱があるように思うが、それはヴィレンドにとつて大したことではなかつた。

とちゅうで繰り返し休みながら、結構な距離を歩いただらう。いい加減、空腹と疲労が限界だと思ったころ、開けた広場のよつな場所にでた。広場には人がいて、たくさんテントのよつなものがある。

ヴィレンドたちは茂みに隠れながら、その様子を観察した。

「村、ではないな。あれは、鉄か?」

「製鉄技術があるみたいだな。つーことは、」れはキャンプつて思つた方がいい。他に街があるはずだ」

ヴィレンンドは、ボックスの言葉にうなづいた。同じ考え方だ。

人々の服は、子どもの世界にいたころと大差ない。だが、女はみな、上下の繋がった裾の長いチュニックを着ており、男は、裾の短いチュニックにズボンをはいている。

色はさまざまだが、服の形は性別によつて決まつてゐるようだ。年齢は大人が多いが、中にはヴィレンンドと大差ない歳のものもいた。だが、それより若い子どもの姿は、みえない。

「出でみるか？」

「うーん。いや、あ、あいつに聞いてみるわ」

ボックスは、ひとりキャンプとは別方向へ歩いていく男を指さした。顔はよくみえないが、歳はヴィレンンドと同じくらいだと思われた。たしかに、相手がひとりだと何かあつたときに対処しやすい。

「お前はここにいる。足を休めとけ」

「わかつた、無理はするな。あの男が神の子ではない」とを、祈つてゐる

「お前、そういう怖いこと言つなつて」

ひらひらと手をふつて歩いて行つたボックスを、注意深く見守つた。もしあの男がボックスになにかするようならば、自分がなんとかしなければならない。

懐に忍ばせてある剣と、金の鍵を確認する。

ここにいると言われたが、ヴィレンンドは這つよつとして移動した。ボックスたちの声がきこえる場所で、そつと木々に身をひそめる。

「なあ、お兄さん。ちょっと聞きたいんだけど」

ボックスが、ひょうひょうとした態度で男に近づいていった。男

の後ろにまわったヴィレンンドからは、男の表情がみえない。しかし、ボックスをみた男は驚いているようだ。

(もしや、この世界では老人の存在はないのか)

剣を強く握りしめるヴィレンンドだが、

「わ、びっくりした！ もじや もじや だね」

といつ男の叫び声で、男がボックスの身なりに驚いたのだと、知る。

確かに、長年牢屋で暮らしていたボックスの身なりは、すさまじい。

「いやあ、ずっと旅をしててさ」

「そうなんだ。せめて着替えた方がいいんじゃないかな」

「そうしたいんだけどさあ、実は迷子になっちゃって。街に行きたいんだけど、あのキャンプみたいなところで道を聞いた方がいいんか？」

あつち、とボックスが人々のいる方を指さした。
そのしゅんかん、男のまとう雰囲気が変わった。こじろなしか、空気が張り詰める。

「君はまだ、あの中に入つてなの？」

男の声が、さつきよりも一段と低い。

「おう、なんか入りずらいやつちゅーか。確認してから行こうかと思つて」

「なら行かないで。入つたが最後、一度と出られなくなるよ

(一度と出られない？)

“どうこいつにとだ。ヴィレンンドは、少し身体を乗りだした。

「出られないって、なんでなんだ。別にいいじゃん」

「あそこは、隔離されているんだよ。流行り病だ。街のひとは皆怖がって、一度でもあの中に入つたり、中の人と関わつたものを街に入れないんだ」

「それは怖いな。なんて病気なんだ？ ペストか？」

「いや、疱瘡だよ」

「ホウソウ？ なんだそりや？」

途端に、男が顔をしかめた。

「知らないの？ どんな遠くからきたんだ」

「あはは、いやあ、すっげえ遠く？ みたいな」

「……。疱瘡は、悪魔の感染症って言われてるんだよ。身体中に癆ができる、それが化膿してつぶれ、死んでいくんだ」

ヴィレンンドはそのとき、ボックスの表情が変わるように気がついた。それは僅かな変化だったが、全身から警戒をにじませていて、気がついた。みえる。

ヴィレンンドは、人々が集まっている集落を見た。隔離されるほど、重い病気の人がいるようにはみえない。

もつとも、多くのあるテントの中では、どうなつていてるのかわからぬが。

「街に行きたいなら、ここから東に真っ直ぐだよ。結構な距離があるから、徒歩じゃきついかもしけないけど」

「そうか、どうもありがとな。街に向かうわ」

「いや、いいよ別に。かわりに、僕とここで会つたこと誰にでも言わないでね」

男はボックスの横を通りすぎ、キャンプとは反対方向へ歩いて行った。

すぐさま、馬のいななきがきこえ、パカラパカラッという馬の足音が遠くなつていいく。さつきの男が、馬に乗つてどこかへ行つたようだ。

ヴィレンドは剣をもつていた手をゆるめて、戻つてきたボックスを迎えた。ボックスの表情は険しく、自然とヴィレンドの表情も険しくなる。

「移動してたのか。都合がいい。街へ急げ」

「どうした、突然。流行り病だからか？」

「ああ。まずい、ここは天然痘患者の隔離地区らしい。急いで出よう」

天然痘、という言葉に、ヴィレンドは目をみはつた。

子どもの世界にいたときに、決して流行らせてはならない流行り病があつた。それが、ペストと天然痘だ。一度発症したが最後、世界が崩壊するとさえ言っていたほどに強力な感染力、そして完治不可能の不治の病だときいている。

（まさか、天然痘が流行つてているとは）

ヴィレンドは医師ではない。それがどんなものかは知らないが、どれだけ恐ろしいものかというのは、繰り返し学んできたために、よく理解しているつもりだ。

ボックスに支えられながら、足早にその場から移動した。

影の向きや、太陽の位置。うつすらとみえる星の位置をみながら、東に向かつて移動する。

神殿につかえるものはそれなりの教育を受けているため、方角を知ることくらい容易い。

(しかし、異界となるとその知識も正しいのか怪しくなるな)

一番の目印になる星の位置が同じなのは、せめてもの救いだらう。方角がわからない今は、それを信じるしかない。

間違つていいのか、それとも遠いからか。

途中で日が暮れはじめ、野宿の準備をすることにした。

幸い、果物は豊富にある。気温も春のようにあたたかく、獣に気をつけて火さえ絶やさなければ、十分眠ることができだらう。

「ボックス、すまないが木片を集めてくれないか。火をつける「わかつた、んじゃあ果物むい」といて」

「リング」のような果物を手渡され、護身用の剣でむいていく。大人の世界では、包丁という便利なものがあつたが、それでもやはり、手に馴染んだ剣の方が使いやすい。

(よくフーシャに怒られたな、なつかしい)

フーシャの見ていないときによく、包丁のかわりに剣で調理したものだ。それに気づくたび、フーシャが「包丁を使いなさい」と言つていた。

もつとも、それもフーシャが元気だったころの話だ。ほとんど歩くことが無くなつてからは、負い目を感じていたのか、ヴィレンドが剣で調理をしても何も言わなくなつた。

ただ、作ってくれてありがとつ、とだけ言つてほほ笑んだ。

果物をむき終えたころ、ボックスが戻ってきた。

「つか、火なんてどうやってつけんだよ」

「火なら、マッチがある。大人の世界は、囚人から武器をとりあげぬのだな」

「そうかもな。異界の住人は恐怖対象だ。関わりたくないんだろ」

マッチは、フーシャと共に泊ったホテルのものだ。『自由にお持ち帰りください、と書かれていたのを見て、一箱ほど懐に忍び込ませておいた。

乾いた木の葉に火をつけ、形を整えた木片の集まりのなかへとそれをいれる。

沈んでいく太陽と反するように、炎が赤く燃え上がった。火を囲むように座り、夕食の果物を食べた。リンゴよりも硬く、酸味がつよい。しかし食べれなくもない。

ボックスをみれば、顔をしかめながらも黙つて食べていた。

食べ終えて一息ついたころ、ボックスがポケットから薬草と石をとりだした。

「さて、と。布を取りかえる。足を出せ」

「変わりの布などないだろう」

「ばつか、なんとでもなるんだよ。清潔にしつかんと、部分が腐つてくるぞ」

ボックスはヴィレンドの布をはずすと、筒から水をかけた。牢屋の中では彼がもつていた筒。おそらく、水筒の一種だ。に、湖で水をくんでおいたようだ。

「多少強引だが、我慢してくれ。なにしろ、なにも道具がないんだ」

「わかつていて、問題ない」

ボックスは軽く笑い、治療に専念した。ときどきと迷いなく処置をおこなう姿は、どうみても医者だ。

そう思つた瞬間、無性におかしくなつた。

「おい、随分余裕だな。なにがおかしいんだ？」

「貴殿が医者に見える」

「どういう意味だ。俺は医者だつつてんだろ」

あきれたような、そんなボックスの声に、ヴィレンドは頷いた。

「ああ。そうなんだが、おかしなものだ」

声に出して笑うと、ボックスも苦笑した。

「ま、今日はゆつくり休め。これからが大変だからな」

「そうだな」

ボックスが突然、着ている服の袖をやぶつた。それを縦に裂き、ヴィレンドの足へまいていく。

その様子をみて、ふと田をほそめた。

「貴殿は俺に、人を信じすぎるなど言つたが、貴殿も十分そうだと思つ」

「あー。そうか？ まあ、お前がフーシャを助けようとしてくれたのを見たるし、悪いヤツじやねえと思つてるからな」

「フーシャは、俺に生きろと言つた」

わたしが死んでも、ねえ、ヴィレンド。あなたは、ずっと生きてね。

そうフーシャが言つていた。ヴィレンドはその言葉にて、まるで誓つように神殿の前でうなづいた。

「だから、俺は生きる」

「おう、生きる。俺も、消えるときがくるまで生きたいねえ」

消える、といつ懐かしい言葉に、今度はヴィレンドが苦笑した。
ヴィレンドたちを待つてるのは、死ではなく消滅だ。

もしかすると、消える前になんらかの形で命が去るようなことがあれば、死という形で最後を迎えるのかも知れないが。

「貴殿とは、いろいろ話したいことがある。子供の世界や大人の世界のことわりについて」

ヴィレンドはそう呟いて、あぐびをかみしめた。今日は様々なことが起こりすぎて、とても疲れていた。

「俺もだ。」こんなことを誰かと話せるなんて、嬉しいねえ。明日が楽しみだ」

「ああ、明日、また」

炎を見つめていたヴィレンドの視線が、さがる。手当てをされた足を見つめたまま、徐々に瞼がおりていった。

4、運命の出会い

翌日は早朝に起きて、移動をはじめた。

昼にならうかというとき、人が住む形跡が見え始めて、それから少し歩いたところに街があつた。

森をぬけた場所からは、少しばかり高いなだらかな斜面がつづいている。その斜面に沿うように、街がある。ところどころ街を囲むように壁があり、まるで街そのものが巨大な屋敷のようにもみえた。

街にはいると、そこそこでチユニックをきた人々の姿がみえた。やはり、性別によつて服の形がわけられているようだ。

圧倒的に男の人口の方が多いが、ときおり見かける女は裾の長いチユニックを着ている。

コンクリートで整備された道に沿つて足を進めれば、左右には露店がひろがつていた。

地面に直接布をひろげ、その上で食べ物や小物を売つている。どうやらこの道が大通りらしく、ところどころで細い道へ分かれていった。

「なんというか。子どもの世界以上に文明が発達してはいるが、大人の世界ほどではないな」

「そうだなあ」

すぐ隣を、馬車が走つて行つた。

大人の世界でみたような、馬の後に四角い屋根のつきの箱がついている馬車ではない。せり出した椅子だけがくつついた、簡素なものだ。

道はコンクリートで整備してはあるが歩道の完備はされておらず、

道全体が歩道と化している。馬車の数は少なく、特別に立派な身なりのものが馬車に乗っているようだ。

「もしかしたら、電気がないのかもなあ。科学が発達していないのかもしれねえ」

「たしかに、電気で動く機械がない」

「とにかく、医者を探すぜ。幸い、この世界は姿かたちで決められてるわけじゃないらしい」

道を歩く人々の年齢は様々だ。かなり高齢の者もいれば、ヴィレンドと近しいだろうと思われる、大人になりかけの年齢のものも多い。

「子どもはいねえな」

「そうだな。あ、いや。あそこにいる」

「ほんとだ。いくつくらいなんだろうな」

家の窓から、外をながめている子どもがいた。しかし、子どもの世界でみた子どもよりも、身体が小さいように思つ。

(小さいとは、どうこういとだ)

もしかすると、子どもから大人になるようだ。子どもよりも前に、成長段階があるのかも知れない。

大人の世界で生まれた大人が、「二十歳」の姿で生まれると言わっていた。不思議なことに、二十歳の姿で生まれてくるが、生まれた当時の年齢は零歳と計算し、その後二十年過ぎたころから身体が成長をはじめるという。

大人の世界で、それを知ったヴィレンドは驚いた。

そもそも、子どもの世界では歳を数える習慣がなく、一年が三百六十五日だということさえ、知られていなかった。

だから、ヴィレンードは実際の歳を知らないし、生まれてから何歳なのか、いつから身体が成長を始めたのか、わからない。しかし、「成長する」ことを「歳をとる」とも言われており、もしかすると元々子どもの世界でも歳を数える習慣はあったのかもしない。

「お。 じじや ね？」

ボックスが鼻をひくつかせた。

「じちから、薬の匂いがするぞ」

そこには、普通の簡素な一軒家だった。

みた感じ、医者がいるとは思えない。

家の前には観賞用の木が一本置かれていたようだが、それも枯れていた。

この家が、目立つて簡素なわけではない。しかし、大人の世界での医者は、裕福でお金持ちな者が多く、そのほとんどが贅沢な暮らしをしていた。

そのため、どうもこの普通の家が「医者の家」と言われても、いまいち違和感がある。

ボックスは、そんなヴィレンードの胸中を知つてかしらすか、ドンドンとその家のドアを叩いた。

「こんちわー」

少し大きな声で、ボックスがさけぶ。だが、返事はない。

「留守か」

「どうだろ。 こんちわー！」

ボックスが、さらに声をはりあげた。

「はーい」

奥から女性の声がした。

「お、誰かいるいる。よかつたー」

笑うボックスだが、ヴィレンドは警戒を強めた。

まだこの世界が安全と決まったわけではないし、なにより自分は怪我をしている。なにかあれば、逃げきれる保証もない。

しばらくして、バタバタと誰かが走ってくる音がした。

足音がドア越しに止まつたかと思うとドアが開いて、中から若い女の人気が顔をのぞかせた。

外見はヴィレンドと同じくらいの歳か、少し下かもしれない。

「あや！ なにこれ！」

ドアから顔だけを出した女のは、ボックスを見るなりおどりいで悲鳴をあげた。

次の瞬間、女的人はまた家へ入つてしまつたが、すぐにドアの間から顔だけをのぞかせた。

「わあ、おどろいた。もつともたなのねえ」

どうやら、この女の人もボックスの身なりに驚いたようだ。

ボックスが笑つて、「いやあ、すぐ髪がのびちゃつて」などと話している間に、ヴィレンドは女人をみた。自然と目がいつてしまい、知らずのうちに観察してしまつ。

黒くて長い髪を無造作にうしろでしばり、大きな目は光に満ちているように輝いている。

とても、綺麗な目だ。

(おどろいた。同じほど歳の、女もいるのか)

子どもの世界では、ほとんどが男だった。女は法殿に数人いたくらいで、あまりみる機会もなかつた。

大人の世界では男女の割合は半分ずつだつたが、ヴィレンンドのようにまだ若い歳の、女をみることはなかつた。
人の多かつた神殿の前でさえ、外見が三十歳をすぎるくらいの女が一番若かつたように思つ。

「んでも。そろそろ髪切ろうと思つてて」「
やだもうー。うちは床屋じゃないわよ」

あはは、と笑う女人。その笑顔がとても可愛くみえて、ヴィレンドは食い入るように彼女をみつめた。

「じゃあ、何屋さんなんだ？」

「うちは医者です」

「医者か！　まいつたまいつた。ほつら、な？　みろヴィレンンドー。」

ふりむいたボックスの目が、輝いていた。医者だというのを、当てたことが嬉しいようだ。

ボックスの視線につられるように、女人人がドアから身体を乗りだしてきた。

大きくドアが開かれ、全身が露わになる。随分と小柄なようで、まるで小動物のようだ。

女人の、大きな黒真珠のよつた目と、視線がぶつかつた。

その瞬間、ドクリと心音が高鳴るのを感じて、とつたに胸を抑える。

「医者をさがしてたの？　あなたが病人かしら。胸が苦しいの？」

「あ、いや。その」

「病人というか、怪我人なんだわ。見てやつてもらえねえかな」
言葉が出てこなかつたヴィレンンドのかわりに、ボックスが答えた。

「ええ。どうぞ、入つて」
ボックスに支えられたまま、ヴィレンンドは家のなかへと入つた。
その間も、前を歩く女人の人をから目が離せない。長い髪が、背中
で揺れている。

「こつちに座つて。実は父が医者なんだけど、今はいないのよ。あ
たしがみてあげる」

そういうと、女人人は奥の部屋に消えて行つた。

「へえ。家のなかつて結構しつかりしてんな。家電がないくらいで、
あつちとあんまり変わんねえし。つておい、きいてるかヴィレンンド」

ボックスに肩をゆすられ、ヴィレンンドは我に返つた。

「あ、ああ。そうだな」

言われてはじめて、女人人の姿がないことに気がついた。
部屋の奥に消えてからも、その姿を追うようにドアを見つめてい
たらしい。

ヴィレンンドは、そんな自分のおかしな動作を「まかすように、部
屋中をみた。
たしかに、フーシャの家と大差ない。むしろフーシャの家よりも
広く、さらに奥に続くドアもあつた。

室内には、診療に使うのだろうと思われる薬品の入つた棚や、診
療道具が置かれている。ほかには、待ち椅子だろう長椅子がひとつ
と、観賞用の木がある。観賞用の木の隣には、可愛らしいウサギの

形の人形が箱の上に置かれていた。

家の外見と違い、中はとてもしつかりとできている。この国のひとは、外装にはこだわらないのかもしれない。

ヴィレンンドは、指定された椅子に座った。

ボックスがしゃがみこみ、ヴィレンンドの足に巻いていた布をはずす。そのまま近くにあつた別の椅子へ、怪我をした右足をのせた。怪我をした患部がみえて、ヴィレンンドは顔をしかめた。初めてみた患部は、化膿して傷口が白く変色している。自分の足ながら、その傷口に気持ち悪さを覚えた。

そこへ、さつきの女の人が戻ってきた。両手に包帯や薬をもつている。

「あたし、ピカラつていうの。よろしくね」

「俺は、ボックス。こいつは、ヴィレンンド。よろしく頼むわ」

「んじゃあ、怪我を見せて、つて。どしたのこれ！」

ピカラは、ヴィレンンドの足を見るなり、すぐ近くへ飛んできた。あまりにとつぜん近くにきたため、ヴィレンンドは息をつめる。

「触るわよ」

ピカラが手袋をして、ヴィレンンドの足に触れた。

「なによこれ。槍でも刺したわけ？ 傷が反対側まで貫通してる。患部もこれ、火傷じやないわよね。どういう怪我の仕方をしたの？」

「あー、なんか刺さったみたいでさ」

「言いたくないなら、構わないけど。この場所じゃあ、歩くたびに痛むでしょつ」

ピカラが、てきぱきと処置をしていく。ボックスほどの手際のよさはないが、触れられた手がとても温かく、すぐにでも治るような

気がした。

「もつと早く手当にするべきだったわね。化膿してる。熱はない？あ、胸はいいの？」「ピカラがきいてきた。真っ直ぐに田^だが合つて、ドクンと胸の音がひとりわ高鳴る。

「あ、ああ。問題ない」「やうなの？ 遠慮しなくていいのよ」

あわてて、胸をおさえていた手をはなした。無意識に胸を押されていたらしい。

そのとき、やけにニヤニヤしながら「ひちをみるボックスに気がついて、軽くにらみつけた。

「ふーん。なるほどなあ」

「……なんだ」「

「べつにい。お前がなあ、意外つづ一かなんづ一か」

「なにが言いたい」

ボックスの言いたいことがわからぬに。にやけた笑みを浮かべる表情に、苛立ちを覚えた。

「あなたたち見ない顔だけど」

手当^てを終えたピカラが、取り外した包帯などの残骸をトレイごと棚へ置いた。ゴミ箱だろう入れものへ、分別しながら投げ入れていぐ。

「こ^の街のひとじやないわよね。どこからきたの？」

「んー、遠いとこかなあ」

「あら、それも言えないのね。残念だわ。じゃあ、少しだけ質問させて！」

ピカラが、真っ直ぐにボックスをみた。ボックスは、おひよと頬について、両腕をくむ。まるで、どんとこーー！ と言つてこむよつだ。

「答えられるところだけでいいわ。それを、治療費にしてあげる

「おひしゃ。実は一文無しでなあ」

「あら、やうなの？ ジやあ、一つ田の質問。彼の足を治療したのは、誰？」

彼、ビヴィレンドを指さすピカラ。

収まりかけていた心音が、また大きく高鳴つた。ビベビベビベ、と少しづつ速さを増していく。

「あー、それは俺だ」

ぱりぱりと頭をかくボックス。

ピカラが、驚いて田を見開いた。

「あなたなの？ 傷口に塗つてあつたのって、ナツメの葉よね。それもすりつぶしただけの」

「や。ナツメには、炎症を治す効果がある。腫れやできものは勿論、傷口に直接塗つてもいい数少ない薬草だな」

「そんなの、聞いたことない。薬草って、そもそも飲むものでしょ

？」

「いや。口からの摂取が基本的だけど、それには決まった煎じ方が必要だ。それ以外にも、塗り薬としてすぐ使う方法があるんだ

どうやら、薬草について相違があるようだ。ヴィレンドにはわからぬことばかりだが、ピカラはとても興味

があるらしい。少しでも、医学を学んでおけばよかつた。

そうすれば、自分もこの会話に入つていけるのに。

そこまで考えて、驚いた。ボックスは医者として子供の世界で学んできたのだし、ヴィレンドは戦士として学んできた。

それぞれの役割があるところに、それをつらやむのはおかしい。

「ねえ、あなたたち今日泊まるところ、決まつてるの？ よかつたらつりに泊まつていかない？」

ピカラが言った。

「こんな怪しい二人組を泊めてもいいのか？ 不用心だぞ」「そりや怪しいけど。でも、あなたの医術に凄く興味があるの…」「へえ。なるほどな。んじゃあ、俺の知識を惜しげもなく伝授するかあ」

一人の会話をきいてみると、どうやら泊まるところになつたようだ。この世界にきて、何もかもがわからない今では、とても助かる。昨夜につづき野宿では、身体が休められない。

ピカラは、奥の部屋にヴィレンドたちを案内した。

そこはいわゆる書斎で、壁は本棚で埋め尽くされていた。本棚には本が所せましと並んでいるが、ヴィレンドには背表紙の文字さえ、読むことができない。

(いや、読めないこともないかも知れない)

ヴィレンドは本棚の前に歩み寄ると、一冊の分厚い本を手に取つた。

大人の世界で学んだ文字と、よく似てこる。まったくの同じではないが、近い字をあてはめながら、読むことができる。

「伝染、病？」

「ああ。最近ね、伝染病がはやつてて。その関係の本が多いのよ」

題名はあつているらしい。振り返ると、ピカラがカップに茶を煎っていた。部屋の中心に置かれた木製の椅子に座ると、目の前にカップが差し出される。

そのまま、向かい側の椅子にピカラも座つた。

「あなた、歩いて大丈夫？ 松葉杖貸しましょうか」

「問題ない」

「コイツ丈夫だから、平氣だろ。もともと戦士として、厳しく育てられたヤツだし」

差し出されたカップに、手をのばす。温かい湯気が顔にあたり、とてもいい香りがした。ちらりとボックスを見るが、すでにカップに口をつけていた。

(早いな)

遠慮と警戒心のなさに、少し呆れる。ヴィレンドもカップに口をつけようとして、ふと思いついた。

(そうか、ボックスには読心術がある)

ボックスには、ピカラの考えていることがわかるのだろう。それは敵か味方を区別するときに、とても役立つ。

「戦士、つてどこかの名家に仕えていたの？」

「そんなもんかな。あ、菓子も食つていい？」

「どうぞ。お腹すいてるのね。お金ないんだっけ」

「そそ。昨日も野宿でさ」

机の上におかれた菓子をつまみ、口にいれるボックス。クッキー

のような白いそれをボリボリとかみ碎き、‘ぐんぐんと飲み込む。

「あ、これうまいな」

「そう? それはよかつた。ところで、ねえ。あなた医者なんですよ? 力を貸してくれないかしら」

ピカラが、身体を乗りだしていく。

「やだね」

「まだ何も言つてないわ」

「伝染病の治療なら、俺はしない」
きつぱりと言い切ったボックスに、ピカラは目をみはつた。ヴィ
レンドも、驚いたようにボックスをみた。

そして同時に、納得する。ピカラは、医学に興味があると言つた。
そして、伝染病が流行つているとも言つていた。

ならば、そのためにボックスが必要で、泊まりないかと声をかけ
たのだろう。ボックスは最初から、ピカラの手当をわかっていた
のだ。

「……なんでわかったの?」

「バレバレだつちゅーの」

「別に、直接患者の手当を頼みたいわけじゃないの。ちょっとだけ力を貸してほしいのよ。ボックス、あなた今、俺はしないって言つたわ。俺にはできない、じゃなくて。もしかして、治療法を知つてるんじゃないの?」

さりに身体を乗りだしていくピカラ。ボックスは焦ることもなく、
変わらず菓子をボリボリと食べている。

「言葉のあやだろ。そもそも、どんな伝染病かも聞いたやいねえの
に、わかるわけないだろが」

わかるわけない、という言葉をきいて、ヴィレンドは微かに眉を

ひそめた。それを隠すように、カップに口をつけて茶を飲む。

ボックスは今、嘘をついた。森の中で、男に流行り病についていたはずだ。

それを聞いていなかつたことにしてまで治療を拒むほど、恐ろしい伝染病なのか。

「疱瘡よ。あなたも知つてゐるでしょう？ 悪魔の感染症つて言われてて、今、大勢のひどが隔離されてるの」

「そりや、賢明な判断だ」

「なんとか、治せないかしら」

「ずずず、と茶を飲み干すと、ボックスは大きくゲップをした。

「その疱瘡つてヤツは、そんなに広がつてゐるのか」

「街は、だいじょうぶよ。発病者がでたとき、その患者にかかわった人たちみんな、一緒に隔離させられたもの。健康な人もみんな一緒によ？」

「それで、俺にどうしろつて？ 隔離されたんなら、もう行けねえじゃん。アンタ、どうするつもりなんだ」

「行くわ。戻れなくてもいいの。一緒に隔離されたとしても、助けたい人がいるの！」

「そいつの歳は？ 発症してから、何日経つた」

「歳は、二十一歳。発症してから、多分十日くらい」

ピカラの顔に、笑みはない。必死だった。

泣きそうだと思ったが、実際に涙を流すことはなく、真っ直ぐボックスを見つめている。

ボックスはそんなピカラをの目を見返して、静かに首をふつた。

「発症から十日じゃ、もう無理だ」

「どうして！」

「今頃、高熱が出ているはずだ。まだかもしれないが、次の高熱が出たが最後。もう、死ぬしかない」

「ピカラは、何か言おうと口をひらいた。しかし、すぐに口をとじて、椅子に座った。

「無理言つて、ごめんなさい」

「いや、泊めてもううのに、力になれず悪いな」

「ううん、いいの。ゆっくりしていってね」

そう言つと、ピカラは力なく笑つた。

その笑みをみた途端、胸が苦しくなつた。

（ピカラの力になつてやりたいが）

ちらり、とボックスをみた。まるで話しを聞かなかつたようにな、変わらず菓子を食べている。ボックスが無理だとうのなら、ヴィレンドにできる」となどないのだ。

茶を飲み終えたころ、ピカラはさらに奥の部屋を案内へと一人を案内した。父親の部屋だといつその部屋は、書斎同様、多くの本が置かれていた。

「「」」を使つて。一人で使うのは、ちょうどことと思つただけ。ベッドは「めんなさい、ひとつしかないの」

「お、ありがとさん」

ピカラが出て行くと、ボックスは真面目な顔になつて黙り込んだ。ヴィレンドは突然静かになつた部屋内で、手元にあつた本を一冊手にとつてぱらぱらとめくつた。

読める範囲で、目に付いた題名を読んでいく。

感染症、遺伝、流行り病。病気に関する辞典のよつだ。

「まずは、「の世界」とを知らねばならないな。……ボックス、落

ち込むな

ボックスは仏頂面のまま、軽くため息をついた。

「落ち込んじやいねえよ。俺は神の子で医者だが、神や法王じやねえ。無条件に万民を救えるほど、えらくねえよ」

そう言つて、ボックスもまた、近くにあつた本を引き寄せた。

「幸い、字がまだ読めるのはよかつた。本からも学ぶことができるしなあ。つかさ、俺よりもお前、落ち込んでんじやねえの？」

「なぜ、俺が？」

「あの子に惚れたんだろ？ 残念だつたな。あの必死な顔。助けたいヤツつて、絶対男だぜ。恋人かな」

「惚れたというのは、よくわからん。そもそも、同じ歳ほどの異性に出会うのも、初めてだ」

軽く息をはいて、近くにあつた椅子へと座つた。じわりと痛む足を、同じように座席へ置く。高いところにあげると、不思議と少し痛みがマシになつた。

「ああ。子どもの世界だと、圧倒的に男が多かつたもんな。大人の世界だと、男女の比率は半々でさ。それもなにか意味があんのかな」

意味、という言葉に、ヴィレンドは静かに頷いた。

異界は、いつたいいくつあるのだろうか。まったくの別世界、だと思つていたけれど、言葉が通じる。そのほかに、大人の世界にも命の樹があつたように、基本的な摂理は同じらしい。

つまり、異界ごとに全くの別の世界が広がつてゐるわけではないようだ。

「なぜ、性別を分ける必要があるのだろうな。大人の世界の結婚という関係も、男女しかできなかつただろう？ 同じ性別ではなぜ駄

「田なのだらうか」

しん、と部屋が静かになつた。

ボックスの返事がないことをいぶかつて、ヴィレンドはボックスをみた。

（何をしているのだらう？）

さきほど手に取つた本のページを見つめたまま、固まつてゐる。

「どうした、ボックス。妙なことでも乗つていたか」

「……乗つてた」

「なにが？」

「この世界では、命は女の身体から生まれるらしい」

「は？」

意味がわからず、ヴィレンドはボックスの顔をまじまじと見つめた。冗談を言つてゐるわけではないようだ。

言つたボックス本人でさえ、その声音は驚きをおびていた。

「なんだコレ。嘘だろ」

「なんだ、どうした」

ボックスは、うなるよう黙りこみ、穴があくほど本を読み続けた。（どういう意味だ？ 命が女の身体から生まれる？）

ヴォレンドには、さっぱり意味がわからない。

人は、命の樹から生まれてくる。それは間違いない。子どもの世界でも、大人の世界でも、それが絶対的なことわりだつた。この世界では、それが違うというのか。

「……それで、男と女が必要なのか」

ボックスが、不意につぶやいた。

「なら、この世界は進んでるってことか。それとも、この世界が「ボックス、説明してくれ。意味がわからない」

「つまりだ！俺らの世界みたいに、この世界では命の樹から人が生まれるんじゃない。じゃあ、人間はどこから生まれてくるのか？人の腹からだ！」

「腹？」

とつねに、ヴィレンドは自分の腹を押さえた。

（人の腹から、子どもが生まれる？ そんな馬鹿な）

「女だけみたいだな。ただし、子どもを腹に宿すには男がいる。おもに、夫婦の間に子どもができるみてえだ」

「夫婦？ では、この世界にも結婚があるのか？」

「そうだ。つか、大人の世界では結婚はあまり需要なかつたけど、こつちはほとんどの人が結婚をするらしい。結婚して、子どもをつむ。その繰り返しで、この世界が成り立つていいようだ」

「では、命の樹は？ 命の樹は絶対的な存在のはずだ」

「わからんねえ。この世界は、なにもかもが違うみたいだな」

ボックスは頭をかきながら、ため息をついた。

「でもこの世界は興味深い。医者の俺としてはな」

（命の樹がない世界、か）

考えもしなかつた。そんな世界が、存在するなど。まだ決まったわけではないが、ありえるはなし。命の樹からで

はなく、別の方法で人が生まれるのだとすれば、命の樹は存在意味を失う。

「ま、おおおい調べていこうや。今は、天然痘に気をつけておけよ
「ああ。ピカラも言つていたが、そんなにひどい病なのか」
「身体中に、腫れものができる。顔は勿論、手足、腹、背中、それ
と内臓。一度目の高熱が最後だ。身体は弱り、そのまま死ぬ
「治療法は？」

「それも完全じやない。だから、天然痘は脅威なんだ
ボックスはそういうて、顔をしかめた。

ヴィレンドは、医学のことはわからぬ。大人の世界にいたころ
も、医学書などほとんど読んだことがなかつた。高齢者に関する書
物ならばいくつか読んだが、根本的な医学とはまた違つものだ。

(昨日は、あの集落に入らなくてよかつた)

昨日、ボックスが止めていなければ、ヴィレンドはあの集落に足
を踏み入れていただろう。感染したとみなされ、踏み入れたら一度
とでることはできなくなるところだつた。

実際に感染し、命を落とす確率も高くなる。

「とりあえず、少し休もう。ボックス、貴殿はどうする？」
「俺はもう少し、本を見てる。興味深いんだ、これが」
「わかつた。すまないが、少し横になる」
「ああ。また熱が出てきたらちゃんと冷やしてやるから、安心しと
け」

ヴィレンドは少し笑うと、部屋に置かれたベッドに横になつた。
部屋には、ベッドが一つしかない。つまり、ヴィレンドかボックス

のうち一人は長椅子で眠らなければならぬといふことだ。

（夕方には起きよう。ボックスにベッドを使つてもうわねば

横になると、すぐに睡魔がでてくる。

ただの過労だとは思うが、もしかすると足の怪我のせいに身体が弱つているのかもしない。

あつという間に眠りに落ちたヴィレンドは、夢を見た。

懐かしい、子どもの世界にいたじるの夢で、唯一友と呼べる相手

パルスの夢だ。

パルスは、夢の中で笑っていた。とても楽しそうに、神の子の力をみせてくれた。

懐かしく、胸の奥から熱が込み上げてくる。

「……パルス」

ふ、と目が覚めた。

辺りは薄暗く、ここがピカラの父親の部屋だと理解するのに、時間がかかった。

出かけたのか、ボックスの姿はない。

身体を起こし、いつの間に置かれたのか、枕元にあつた水差しに手をかけた。

水で喉をうるおして、ほっと息をつく。

（パルスは、どうしているだう）

先ほど見た夢のなかのパルスが、笑っていたことに安心する。

今まで、なるべく考えないようにしてきましたつもりだった。パルスは法王に逆らって、禁忌とされている異界へ、ヴィレンドを送つたのだ。

無事なはずがない。捕えられて牢屋暮らしなのか、酷い拷問を受けているのか。

いや、命があれば、まだいい方かもしれない。

(最悪の場合、パルスは……)

そこまで考えて、首をふった。

あのとき、パルスも一緒に異界へこればよかつた。あの状況でそれが可能だったのかはわからないけれど。

パルス、それにフーシャ。

ヴィレンドのために、皆が不幸になる。

「しつかりし。弱気になつて、どうする」
声をだして、自分に言い聞かせた。声に出さねば、耐えられなかつた。

(ボックスは、いつ帰つてくるのだろう)

夜の闇は、人の弱い部分をひきずりだす。

陽が沈んだばかりの、薄いコーヒーを流したような部屋の中では、よくないことしか考えられなくなつてしまつ。

ヴィレンドは、立ち上がると部屋を出た。

昼間、茶を飲んだ書斎には誰もいない。薄暗く、人の気配さえないようだ。

さらに、治療してもらった診療室まで足を進めたが、やはり誰の姿もない。

「……誰もいないのか」

ボックスは、この世界に興味をもつていたし、探索にでも行って

いるのかもしない。

ピカラは医者の子だし、どこか治療に行っているのだろう。ヴィレンドは昼間治療を行つた椅子に座ると、黙つて部屋をみまわした。コツコツコツと壁時計の秒針が動いている。

時計は、大人の世界のものと同じ形をしている。この世界も一日が二十四時間のようだ。

ではやはり、一年は三百六十五日なのだろう。大通り側の壁越しに、僅かに人の声がした。来客かと思って顔を向けたが、声はだんだんと遠くなつっていく。家の前を、通りかかっただけらしい。

（他にも、人がいるのか……当たり前か）

まるで、世界に自分だけのような錯覚をおぼえていた。誰も知らぬ人の声がきこえただけで、ほつと安心する。

ヴィレンドは、ポケットをまさぐつた。なから金の鍵を取り出し、それを眺める。

この鍵に、本当に願いをかなえる力があるのだろうか。

パルスから、もらった最後の贈り物だ。結局、一度も使っていない。

（そういえば、この世界にくるときに。ボックスが、使つていたな）

ボックスは、時空の扉というものを開くのに使つていた。大事なものだから、失くすなとも言つていた。ではやはり、この鍵は特別な存在なのだろう。

「ピカラ、いる？」

不意に、男の声がした。

通り側の、エアの匂いへだ。

「ピカラッヘ。」

男がまた、呼んだ。すぐニゾンドンと扉を叩く音もある。

(「の話、どこかで聞いたことがある）

少し低い、けれども透き通った綺麗な声だ。
思に出でうとするが、男のピカラを呼ぶ声にて魔をそれで、思う
よつて考へることができるない。

「おーい、ピカラ！ いなこの？ あ、窓こじる、
ギイ、ピドアが開いた。ロウソクを持つた白いチューリック姿の男
が、部屋こはいつてきた。

その男の顔をみた瞬間、ヴィレンダは固まつた。患者を停止した、
と言つた方が正しいかも入れない。

なぜなら、ヴィレンダのよく知る男の顔だつたからだ。

(嘘だらうへ、なぜだ、いや、しかし…)

中性的な顔立ちに、女性のように線の細い身体。ロウソクを持つ
細い指先まで、同じではないか。
間違いない。子どもの世界で別れてきたはずの、バルスだ。
ヴィレンダは、立ち上がつた。相手の男は、それに驚いて一歩つ
しひこせがつた。

「なぜ、ここにいるんだ？ まさか、移動してきたのか？」

「は？ なんだい、君は」

男は、怪しこものでもみるよつた田で、ヴィレンダを見た。

ヴィレンードは、歩み寄りうとした足をその場で止めた。

(パルス……じゃない?)

よくみるとまでもなく、相手は自分と変わらない歳の男だ。声も高めではなるが、男性独特の低い声をしている。

パルスが成長すれば、この男のようになるのだろう。

「すまない。人違ひだ……親友に似ていたものだから、つい」

謝ると、男は苦笑いを浮かべた。

「いや、いいよ別に。それより、ピカラはどうしたの?」

「今はいないようだ。どこに行つたかはわからない」

男はドアをしめると、そばへ歩み寄つてきた。ロウソクの火をヴィレンードの近くにあつた小卓へ置くと、そばにあつた椅子へ座つた。

「なら、待たせてもいい」「そうしてくれ」

ヴィレンードは、炎の影がうつる男の顔をみた。

(やはり、パルスに似ている)

しかしさきほど聞いたことがあると思つた声は、パルスのものではない。それとは別に、この男に会つた気がするのだが、思い出せない。

「あんまり見つめられると、穴があくよ」
男がまた苦笑して、ヴィレンードをみた。

「あまりに綺麗な顔をしていたから、見入つてしまつた」

「あはは、面白いこというね。でもあんまり、そんなこと言わない

方がいい。ぼくは、嫌われ者だからね」

「嫌われもの？ なにかしたのか」

「何もしてないよ。僕はね、生まれつき変な力があるんだ」

ヴィレンドは、驚いて男をみた。変な力とはつまり、神の子だと
いつことか。

人の腹から命が生まれるこの世界でも、神の子は生まれるらしい。

「変だな、初めて会う君に、こんなことを話しちゃうなんて。でも、
すぐにはれることだから、いいか」

「どんな力なんだ？ 別に、人を困らせているわけではないのだろ
う。役に立つならあるだけいいじゃないか」

ヴィレンドが言つと、男は驚いて顔をあげた。

その目がこぼれんばかりに見開かれていて、ヴィレンドの方がお
どろいた。

「気持ち悪くないの？ 僕は悪魔の子かもしれないよ」

「悪魔？ ああ、魔物ということか。魔物にはそんな力はない。特
殊な力をさずけるのは、神の役目じゃないのか」

「神？ 神様？ そんなふうに言われたのは、初めてだ」

男は、少しだけ笑つた。その屈託ない笑顔はやはり、パルスによ
く似ていた。

「君は、この街の住人じゃないんだね」

「なぜわかる？」

「僕を知らないから。僕は、この街では嫌われ者で有名だからね。
小さいころからずっと、街のはずれに住んでるんだ」

嫌われ者。その言葉に、ヴィレンドは軽く眉をひそめた。

(むしろ、この男が神の子ならば、尊敬してもいいほどだ)

大人の世界では神の子だといつだけで、地位や名譽が与えられたところだ。

この世界では、嫌われる対象にしかならないのか。

ヴィレンドは、男をみた。

(……きいてみるか)

どうしても、知りたいことがある。

ヴィレンドは、相手のいかなる動搖も見逃さないよう注意深く見つめながら、ゆっくりと口をひらいた。

「貴殿は、命の樹を知っているか

「命の樹？」

「そうだ。知らないか？」

「うん、知らない。きいたことないけど。君の落し物かなにか？」
男が、軽く首をかしげた。

(嘘を、言つてこらみづにはみえない。ならばやはり、この世界の命は人の腹からのみ、生まれてくるのか)

命の樹がない世界があるとは思わなかつたヴィレンドにとって、それは信じられないことだつた。

すべての母であり、命の源である命の樹。その命の樹が、ときおり特殊な力を与える人間がいる。それが、神の子だといわれてきた。

(神の子の力は、命の樹が与えるのではないのか)

この日の前に座る男が神の子だとすれば、人の腹から生まれた子

も神の子になるとこいつ」とだ。

「では君は、人の腹からつまれたのか

「え？ セウだと思つよ」

「思つ？」

「僕は、小さいころに親に捨てられたから

親というのは、ガイレンジにとつては命の樹のことだ。しかし、人の腹から人が生まれるこの世界では、その生んだ人間のことを「親」と言つのだらう。

(その親に、捨てられたのか)

「こんな力、やつぱりなんの意味ももたないよ。僕の母さんだって、気持ち悪がつて僕を捨てたくらいなんだから」

悲しげに笑つと、男は時計をみた。

静かな部屋に響く秒針の音が、とてもうるさい。

「ピカラ、遅いね」

「そうだな。もう、外も暗いというのに

また、しんと静寂が落ちた。

そのときまた、ドアの向こうで話し声がきこえた。

ピカラとボックスが帰ってきたのかと思ったが、近づいてきた話し声は知らぬ者の声だ。

家の前を通りすぎ、どんどん声が遠くなつていく。

「僕ね。親に捨てられたあと、ポルビア先生に拾われたんだ」

ふと、男が話出した。

ヴィレンドはそつと、耳を傾ける。

「街の人たちの反対で、一緒に暮らせなかつたけど。でも、ポルビア先生は僕を実の息子みたいに可愛がつてくれて、テッドと一緒に、街はずれの僕の家によく遊びにきてくれたんだ」

「それは、誰だ」

「ピカラのお父さんと、お兄さんだよ。一人とも、名医なんだ」

「そうか。会つたことがない」

「うん。一人とも、今は隔離されてるから」

隔離といつことは、天然痘にかかつたということか。

(せうか。この声、あのときの男か)

ヴィレンドは、思い出した。この男の声に聞き覚えがあると思つたが、隔離された人々の手前でボックスが道をきいた、あのときの男だ。

「テッドが高熱をだしたんだ。もう助からないかもしれない。だから、変わりに手紙を預かってきたんだけど」

そのとき、玄関のドアが、ガチャリがひらいた。

突然の訪問者は、部屋に入つたところで立ち止まり、ヴィレンドたちをながめた。

かなり高齢の男だが、歳を感じさせない動きだ。田元と口元の深い皺が、男の顔を厳めしくみせてくる。

「おー、なに？ 出迎え？」

「……ボックス？」

ボックスの声だ。

「いやあ、ほら。あんまり伸び放題だったから、小さつぱりしてきました」

「ひげも剃ったのか。というか、別人じゃないのか」「うわ、ひつでえ。あれ、確かお前、森で会ったヤツじゃん」

ボックスが、男をみた。

「あ、あのときの。よかつた、街に着いたんだ」

「おうよ。ありがとなあ」

ボックスは近くまでくると、ポケットから取り出した箱を机にのいた。

椅子に座ると、箱を開いて中身を確認している。

「おー、ヴィレンド。手を出せ」

「手を？ なぜ？」

「さつぱりしたあと、この街をみてきたんだけど。まずい、街の西側で、天然痘患者が出たらしい。俺たちも歩いた道筋だ」

ぎょっとして、ボックスを見返した。

「馬鹿な、患者は完全に隔離されているのではないか」

「天然痘は、潜伏期間があるんだ。かかるてから、発症までに数日を要する。発症するまで、かかるてるかどうかわからんから、その間に広がっちゃまうこともあるんだ」

「待つて、天然痘って疱瘡のこと？ この街で患者がでたの？」

男が、立ち上がった。

その目は見開かれ、拳は強く握りしめられていく。

「そうだ。発症患者を隔離しただけじゃあ、感染は止まんねえ。悪魔の感染症つてのは、そういうことだ」

「そんなつ、ピカラは？　まさか、それをきいて治療に向かつたんじゃつ」

男がドアへ向かつて駆けだした。その腕を、ヴィレンンドがつかむ。

「待て、行くな」

「どうして！　ピカラだけでも、無事でいてくれないと」

「行つてなにができる」

男は、ヴィレンンドを睨みつけた。だが、すぐにその視線をさげて、もとの椅子へと座つた。

わかつていいのだ。自分が行つたところで、なにもできないと。それどころか、この男は街に住めないほど民衆に嫌われていると。そんな嫌われものが天然痘患者のもとへ駆けつけたら、人々はどう思うだろ？

流行り病をすべて、この男のせいにされかねない。

「ま、そういうわけだ。お前も感染してゐる可能性がある。そいで、種痘を打とうと思う」

ボックスが、さきほど机においた箱から、耳かきのような細長い鉄の棒を取り出した。

「種痘？　なんだそれは」

「天然痘の予防薬だ。いわゆる、ワクチンつてヤツだな」

「ワクチン？　天然痘にそんなものがあるのか」

驚くヴィレンドと同様に、うなだれていた男も勢いよく顔をあげた。驚きに、目を見張っている。

「だが、完全じゃない。まれだが、このワクチンが原因で命を落とすものもいる」

ボックスがヴィレンドの腕をとつて、袖をまくしあげた。

「待つて、なにをするの？ 予防薬、つて飲むんじゃ」

「薬は全部飲みものなんか、この街じゃあ」

ボックスはヴィレンドの腕を掴んだ手を放して、軽い溜息をついた。

「種痘つつーのは天然痘ウイルスそのものを弱毒化して、人の腕にうつんだ。つまり、先にわざと天然痘に感染させるんだ」

「そんなことをしたら、大変なことになるよー」

男がボックスの持つ鉄の棒をみて、ふらふらと後ろにさがった。

男の言葉は、ヴィレンドの心中そのものだった。感染させるなど、死んでくれと言つているようなものではないか。

「だから、弱毒化してあるんだ。感染させたウイルスは、ひと月ほどで完治する。一度感知した病原体は、その人の身体の中で抗体ができる、一度はからなくなる」

「どういうこと？ ちょ、こっち向けないで！」

「つまりなあ、先にちょちょいと感染させて、治しちまつと。もつ天然痘にはからないんだよ」

「本当なのか？ 実際に試したことは？」

「ある。俺がまだ法王につかえてたころ、一度天然痘が流行った。

そのとき、俺自身にも種痘を打つた。ヴィレンンド、この種痘の作り方を教えたのは、法王自身だ」

ヴィレンンドは、ボックスの顔を見返した。いつもの笑みは浮かべていない、真面目な表情のボックスと目が合つ。

法王は、絶対的な存在。しかし、その姿は一度として、見たことがない。

法王に仕える神の子の中でも、ほんの数人しか会うことが許されないという、雲の上の存在だ。

「法王に、会つたのか」

「ああ。全身に布かぶつてたから、顔は見えなかつたがなあ。種痘の存在を俺ら医者に教えたのは、間違いなく法王だ。その当時の俺はまだ子どもだったから、法王の偉大さに感激したものさ」

法王は、神に等しい。決して朽ちぬ身体をもち、豊富な知識と甚大な力で世界を守る存在である。

その法王が、種痘をワクチンとして広めたというのなら、間違いはないのかもしれない。

「わかつた。それを打とう」

「君！ 天然痘にかかってるかどうかわからないじゃないか。感染してないのに、わざわざワクチンなんか攝取しても無駄になるだろう？」

「大丈夫だ、ボックスが言うのだから、間違いはない……と思つ」
「思う、つてお前なあ」

ボックスが、声をたてて笑つた。

つられて、ヴィレンンドも笑つた。さきほどボックスに掴まれた方の腕を差し出し、自分で袖が下がつてこないように抑える。

「正氣かい？ ああ、もう。見てられないつ
「じゃあ、ちくつてするぞー」

細い銀の棒の先が、尖っている。その先が、ヴィレンドの腕に触れた。

ちく、と肌を刺す痛みと共に、僅かに血がにじむ。針の先が、皮膚の中でわずかに動く。

「はい、終わりー。うー、針が触れたところ、絶対に触んなよ。いいな？」

「ああ、わかった。これで終わりか？」

「そ。三日後くらいに、少し腫れてくるかもしれんし、熱が出るかもしんねえ。でも、そこから回復に向かう。大丈夫だ、安心しろ」

ボックスは、使った銀の針を布でくるみ、また箱の中に戻した。次にまた銀の針を取り出して、今度は自分の腕に刺した。

「ボックス？」

「俺も打つとかねえと。前に打つたのは、もう六十年以上前だ。ワクチンの寿命は、だいたい二十年ほどだそだからな」

自分の腕に刺した銀の針を、ボックスはまた布にくるんで箱に戻した。

「どうやら、一本の針で打てるのは一人までのようだ。

「これは、発症した患者には効かないのか？」

「いや、発症七日以内なら、効くことも多いらしい」

「ならば、さつき言っていた街の西側で発症したといつ者も治るんじゃないのか？」

「じゃないのか？」

ヴィレンドの言葉に、ボックスは苦い顔をした。

（まさこ）ことを、言ってしまったのだろうか

そう思つたのと、男がはつと顔をあげたのは、ほぼ同時だった。

「治るの？」

「お前、種痘を信じてねえんだろ」

「発症してからでも、治るのっ？」

男が、重ねてきいた。

ボックスがそんな男に対して、ひるむことハハでもほひつよひ手をふる。

「んなもん、わかんねえよ。さつきも言つたけど、種痘が原因で命を落とす者もいる。誰が駄目で誰に効くのかなんて、俺も知らん」「でも、助かるかもしないんでしょ？」

「あー！ お前、信じてねえんだろうが」

「信じるよー 信じるから、だから、ポルビア先生とテッドを助けて」

ボックスが、ため息をついた。箱の中から銀の棒を一本取り出して、男に向かい合つ。

「じゃ、腕だせ。助けて、つてことはそいつら隔離されてるんだろ？ だつたらまず、自分の予防だ。ほら、言つとくが種痘は完全じやねえからな」

ヴィレンドは、黙つて男の様子を観察した。

(あれだけ騒いでいたのだから、腕を出すはずがないだろ？)

ボックスも、意地悪だ。
だが、ヴィレンドの予想とは反対に、男は迷うことなく腕を差し出した。

驚くヴィレンドに、男は厳しい顔で言った。

「先生たちが治る可能性があるなら、僕はなんだつてする」「ほう、なかなか見込みあんじやねえの」

銀の針が、男の腕に刺さつた。軽く顔をしかめた男だったが、針が抜かれると何事もなかつたように椅子へ座つた。

「さつきも言つたが、触るんじやねえぞ」

「わかつたよ。熱も出るかもしれないんだよね」

「そうだ。つか、お前なんでここにいるんだ。さつきのあわて具合からすると、ピカラの知り合いか？」

「そう。ピカラを待つてるんだよ。テッドが高熱を出した。もう助からないかもしれないから、テッドから手紙を預かってきてるんだ」「へえ、わざわざ橋渡しをねえ。それで、様子を見に隔離場所へ行つてたのか」

ボックスが銀の針を箱にしまつた。箱のふたを閉じたしゅんかん、その手を止める。

ボックスは軽く目をみはり、口元に手をあてた。

「まで、そのテッドってヤツは二十一歳か」

「え、そうだけど。よく知つて」

「まずい。ピカラのヤツ、そいつに会いにいったんじやないか！」

ボックスは立ち上がると、部屋の中にある医療道具をかき集めた。突然の行動に、ヴィレンードは椅子に座つたまま、ただ啞然とした。

「ピカラが、テッドに会いに行つたの？ なんで急に？ ピカラは、隔離場所へは行つてないんだ。中の様子なんて、知つてゐるはずがない」

「俺が教えた。発症後十日経つた患者は、そろそろ一度目の高熱が出来るつて。軽率だつた、言うんじゃなかつた！」

ありつたけの医療道具をかき集めたボックスは、それらを皿についた鞄につめた。

「お前ら、ここで休んどけよ。種痘接種後は安静にしてろ、いいな？」

「ボックス、どこへ行くつもりだ？」

「俺は医者をやめた。もうこの手で誰かを殺すのは嫌なんだ。だがな、俺のせいでピカラが死ぬのは放つておけねえ。俺を命がけで助けた、バーチとフーシャに申し訳がたたん！」

ボックスは、隔離場所へ行くつもりだ。

ヴィレンードはあわてて立ち上がると、身の回りにある必要そなうなものをかき集めた。

「待て、なら俺も行く」

「駄目だ、ここにいる。もしお前らがきたら、俺は種痘を全部捨てる。作り方も教えねえ。いいな！」

「なぜだ、ボックス！」

「せめて、三日はここで大人しくしてしてくれ。熱がでなければ、来てもいい。お前もだ、名前は知らんが、ついてきたらお前の助け

たいやつらの治療はしない。いいな

ボックスが、男を睨みつけた。

その壮絶な顔に、ヴィレンドはなにも言つことができなかつた。やがて、ボックスはドアを蹴破る勢いで、部屋を出て行つた。開けたドアから入つてきた風が、ぼつと音をたててロウソクの炎を消した。

(そういえば、まだボックスに出来つて三日程度か)

もつと、長い間共にいたような気がした。フーシャからよく、彼の話しきいていたからかもしれない。

「僕、どうすればいいんだろう」

男が、ぼそりとつぶやいた。ボックスに気圧されたのか、椅子に座つたまま行こうかどうか迷つているようだ。

「ボックスがああ言ったのだから、三日は大人しくしていよ。そういうえば、名はなんという?」

「僕は、パルスっていうんだけど。あ、今ロウソクつけるから」

(パルスだと?)

ヴィレンドは、パルスと名乗つた男をみた。

パルスによく似た、男だと思つていた。まさか、名前まで同じなど、ありえるのだろうか。

しばらくして、パルスの手によつて再びロウソクが灯された。

ヴィレンドはパルスに、「子どもの世界にいたパルスではないのか」とききたかつたが、炎の揺らめく向こうにみえたパルスがあまりにも弱弱しくみえて、きくのをやめた。

彼は今、家族同然であつたポルビアとテッヂ、そしてピカラを失うかもしれない状況なのだ。

その夜は結局一睡もできず、押し寄せる睡魔に身を委ねたのは、朝日がのぼつたころだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3861m/>

子どもの世界

2010年10月9日21時12分発行